公同書簡　四

ヨハネの手紙一　連続講解説教

始・二〇一二年一〇月　七日

至・二〇一三年　七月　七日

ヨハネの手紙二・三・ユダの手紙　連続講解説教

始・二〇〇〇年　二月一三日

至・二〇〇〇年　四月　九日

辻　幸宏

本説教集の内ヨハネの手紙一は、二〇一二年・一三年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。また、ヨハネの手紙二・三ならびにユダの手紙は、二〇〇〇年に上諏訪湖畔伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思い、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

今回で公同書簡が完結しますが、今後順次、他の書簡の説教集を印刷していく予定にしています。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊　公同書簡一　ヤコブの手紙
二　ペトロの手紙一
三　ペトロの手紙二

二〇二〇年一一月

辻　幸宏

「永遠の生命」　ヨハネの手紙一　一章一～四節　　二〇一二年一〇月七日

Ⅰ　世代の移り変わり

使徒ヨハネが福音書と手紙を書き記したとされています。執筆年代は八〇年代後半から九〇年代初めとされています。主イエスの十字架と復活から約五〇年、六〇年が経った時代です。

この頃、教会でも主イエスの十字架と復活を直接見た人々は少なくなり、二世・三世の信徒が多くなってきていました。ですからその信仰は自ずと当初とは違ったものとなり、キリストの十字架と復活のリアリティが薄れ、抽象的な信仰となってきた時代です。そして、「キリスト教もどき」、歪んだ福音を伝える人々、つまり偽預言者・偽牧師、さらに異端者が出てきていました。

今の日本も同じような状況ではないでしょうか。戦後のキリスト教ブームが到来し、福音宣教が広まっていきました。戦後社会において、国造りが進む中、同じようにキリスト教会が成長していきました。今の教会の礎を築いた人たちの子どもたちの世代、つまり戦中生まれから団塊の世代の人々が、今の教会の中心を担ってこられました。そうした第二世代の人たち、牧師・長老・執事たちが引退し、この世での生涯を終え、天国に凱旋する時を今、迎えています。教会の礎を築いてきた初代の諸先輩方の働きを見て・聞いてこられた諸先輩と、それを知らない第三世代以降の人々とは、生き方も信仰も、おのずと違ったものとなってきます。今、私たちは、どのようにして、次の世代に福音を伝えていかなければならないのか、という大きな課題が与えられています。

Ⅱ　聖書に聞け！

ヨハネは繰り返して「私たちが聞いたもの、目で見たものを……伝えます」と語ります。直接体験し、見聞きした人と、それを伝え聞いた人々とは、おのずと感じ方は異なってきます。戦争体験や、震災体験でも同じことが言えます。「百聞は一見にしかず」です。直接それらのことと関わりのない人たちに語り、理解して頂くことは、非常に困難です。人間の努力・熱心も必要ですが、主に委ねなければならないことです。

真実を知るためには、直接当事者から聞くことが必要です。歴史を研究する時、大切なことは一次資料です。主イエス・キリストは、二〇〇〇年前に話しを行い、奇跡を行い、十字架と復活の御業を成し遂げられました。そうであれば、主イエス・キリストが話し、奇跡を行い、十字架と復活を遂げられた現場にいて、それを見聞きした人たちが、事実に即して、主イエスの行われた真意を汲んで語った言葉に聞かなければなりません。だからこそ私たちは、主イエスの愛弟子であり、使徒であるヨハネの言葉、神の御言葉である聖書の言葉に耳を傾けなければなりません。

Ⅲ　永遠から生きておられる御子と御父

ヨハネが、私たちに語らなければならなかったことは「初めからあったもの」についてです。聖書が「初め」と語る時、それは創世記の初め天地創造の時を語っています。その時すでに命の言である方がおられました。そして天地創造はこの方の発せられる言葉により成し遂げられました。

そして初めからあった命の言が、現れました。ヨハネはそのお方を見て、話しを聞いたのです。つまりこのお方こそが神の御子イエス・キリストです。神である方が人となられたのであり、二性一人格です。そして命の言であった御子は、御父と共にありました。つまり主なる神は、御父、御子、さらに御霊なる三にして一人の神、三位一体の神です。三位一体と二性一人格を認めることはキリスト教会にとって大切なことです。

Ⅳ　聖餐に与る交わりに入れられている私たち

しかし、二〇〇〇年前に人となられた命の言である御子についての証言を、なぜ私たちは聞くことが求められるのでしょうか？　それは知的理解を求めるのではなく、信じることが求められています。それは神と私たちが霊的な交わりを持つためです。つまり御父と御子と聖徒であるヨハネや弟子たちは、交わりの中にありました。初めからおられる神、永遠から永遠に存在される三位一体なる神との交わりに私たちも招かれ、私たちも神の永

遠の交わりに入れられています。つまり、神を信じて救われることは、キリストが十字架の死から甦り、天に昇られたように、私たちもまた、肉体の死を迎えたとしても、復活の体が与えられ、永遠の御父・御子・聖霊なる三位一体なる神と、聖徒たちとの交わりに入れられ、永遠の祝福に満たされています（参照・ウェストミンスター二六章一節）。

「光の中を歩む」　ヨハネの手紙一　一章五～一〇節　　二〇一二年一〇月一四日

序

主イエス・キリストの十字架と復活から五〇～六〇年経ち、主イエス・キリストの十字架と復活を直接知らない世代が多くなっていました。そのため、キリスト者の信仰は、抽象的・世俗的になってきています。また、福音から離れ、キリスト者を惑わす偽牧師、偽教師、異端者たちが教会の中に入ってきています。そうした中、主イエス・キリストと共に生活し、主イエスの言葉と奇跡を見聞きした使徒ヨハネは、改めて福音の証言を行います。

Ⅰ　聖俗二元論を否定する神

偽教師の中に、「神との交わりを持ちつつ、闇の中を歩む」ことを認めることを語る人たちがいました。「闇」とは、罪・悪のことです。つまり彼らの主張は、律法廃棄論者であり、「神による救いは霊的なものであり、肉的なこの世の生活は救いとはまったく関係がないために、この世における生活は自由だ、好きに生きれば良い」といったものです。

主イエスは、律法主義者たちに対して、福音から離れた生き方であり福音に生きることを求められました。彼らの主張は、律法を守ることによって、救いが与えられることでした。改革派教会の創立宣言は、私たちの信仰は「律法主義者」でも「律法廃棄論者」でもないと主張しました。つまり、私たちに与えられた救いは、主なる神の御計画に基づいて、

主によって一方的に与えられた救いが実現するのであり、救われ、罪赦された者が、救いの喜びに満たされて、律法に従って生きるのです。

そのためヨハネは、神による救いに入れられた者が、律法廃棄論者でないことを教会と社会に示す必要がありました。神の主権です。神の御支配は、どこまで及ぶのか？　律法廃棄論者たちの思いは、神の御支配の範囲は霊的な分野のみで、肉的な所にまでは及ばない聖俗二元論です。しかし神の御支配はこれほど小さなものではありません。主は天地万物を創造し、私たち人間を創造された時、主は人間を神に似せて造られ、命の息を吹き入れてくださいました。主は創造された天地万物を、そして私たち人間のすべてを今なお御支配になられています。私たち人間は、主のお許しがなければ、今の時も生きることはできません。そして、すべてを御支配になられている主なる神は光であり、闇がまったくなく、完全な義・聖・真実なお方です。

Ⅱ　すべてを明らかにされる主

悪事も、言葉にしない心の中も、人に対しては隠し通すことができるかもしれません。しかし神の御前では何一つ隠すことができません。この時私たちは、神の御前に自らの姿を顧みなければなりません。主は私たちのすべてをご存じであり、その行い、口から発する言葉、心の中までを知っておられます。そして主の御前では、私たちのすべてが、律法（十戒）の言葉に適っているかが問われます。主イエスは、金持ちの青年の譬えをお語りになりました（マタイ一九章）。彼は救われるために神の律法を一生懸命に守っていることを主イエスに伝えました。行いだけでは守ろうとすれば守ることができます。しかし主イエスは彼の心を見ておられます。「隣人を自分のように愛しなさい」（同二二章三九節）とお語りになる主は、「盗んではならない」とお語りになります。そして隣人としての貧しい者の苦しみを覚える時、自らの持っているものを分かち合うことを求められます。ここに主の愛が示され、「持っている物を売り払い、貧しい人々に施す」ように（同一九章二一節）とお語りになります。これができない弱さ、罪が私たちの内に潜んでいるので

す。だからこそ、「自分には罪がないと言うなら、自らをあざむいており、真理はわたしたちの内にはない」とヨハネは、偽教師たちの教えを否定します。

Ⅲ　救いに生きる人生

同時に、主は私たちを愛していてくださり、私たちの罪を赦し、救ってくださいます（九節）。つまり、御父・御子・御霊の三位一体なる神は、自らの罪を受け入れ、主を信じる者に対して、救いをお与えくださいます。この私たちを救うために、御子は十字架にお架かりになり、私たちに代わって私たちの罪の刑罰を担ってくださいました。だからこそ、私たちは自らが罪人であることを受け入れ、主の御前に告白し、悔い改めることが求められています。そして私たちの罪の贖いと救いのために、御子イエス・キリストが十字架に架けられたことを信じなければなりません。そうすれば主から罪が贖われ、救いが与えられます。信じる者は救われます。

さらに私たちは、神との豊かな交わりがあり、神との交わりに生きるキリスト者は、神が行われること、神が求めておられることを実践していくものとされます。つまりキリストに倣う生活が求められています。主は、主の御声に聞き従い、主の指し示される律法に従った歩みを求める私たちを良しとしてくださり、神の恵み、祝福に満たしてくださいます。そして私たちは、律法としての十戒により、自らの罪が示されたように、同じ律法を用いて、主が求めておられる光としての義・聖・真実な生活を知り、それを求めた歩みを行っていくことができます。

「神を知り、神に従う人生」　ヨハネの手紙一　二章一～六節

二〇一二年一一月四日

Ⅰ　創造主なる神

皆さんにとって神とはどのような存在でしょうか？　信仰を心の問題、精神的な事柄と捉えている人がいます。彼らの信仰は、行動（生活）とかけ離れたものとなります。二元論です。そうなれば聖書を読むことも少なくなり、教会に行かなくても平気になってしまいます。別の言い方をすれば、そういう人にとって神は非常に小さな存在です。自分の心の中にいれば良いのであり、自分の必要な時にのみ、求める神です。つまり、あなたという存在が前提にあり、神を心の中にしまい込み、自分が主体であり、神は従属的になっています。

しかし私たちが考えなければならないことは、神はどのような方として存在されているかです。つまり、御父・御子・御霊なる神は、天地万物をお造りになり、今も全世界を治めておられるお方です。私たちが今、命が与えられて、生きているのも、神の恵みによります。神は、私たちの心の中に収まるような小さな存在、概念的な存在ではありません。この世のすべてのものを御支配し、司られているお方です。愚かな金持ちの譬え（ルカ一二章一三～二一節）、アナニアの話し（使徒五章）を忘れてはなりません。

生きて働く主なる神の御前に私たちは命が与えられており、私たちは主によって作られた被造物です。だからこそ、三位一体の神の御前に、私たちは畏れをもって生きなければなりません。神を知るからこそ、神の大きな御力を知り、主のお語りになる御言葉にひれ伏し、聞き従うものとされます。この時、主なる神は、裁きを行われる恐ろしい神ではありません。神を知ろうともせず、知らないのに否定するからこそ、主の裁きが示されるのであり、主の御力を知り、主を畏れて生きる時、主は私たちを救い、命をお与えくださり、主の恵み・祝福に満たしてくださいます。

Ⅱ　仲保者イエス・キリスト

しかし一方、主の御前に畏れを持ち、主の命じられる律法に聞き従って、キリストに倣って生きようとしても、罪人である私たち人間は完全に律法を全うすることはできません。失敗を繰り返し、罪を繰り返します。しかし主なる神は、「だからお前はダメだ」とはお

語りになりません。それでもなお、主を信じ、主の御言葉に聞き従おうとする姿を主は良しとしてくださいます。そして、その罪のために、御子であり、弁護者、つまり仲保者であるイエス・キリストの存在をお示しくださいます。

キリスト賛歌がフィリピ書二章六～八節に記されています。神の御子が、貧しい家に生まれられました。そして律法を司られるお方が律法に仕え、人々に仕えられました。そしてキリストは地上での約三三年と言われる生涯にわたり、罪を一つも犯すことなく、律法に仕えられました。これは、最初の人アダムとエバが主なる神の御前に果たすことのできなかった律法への服従を、御子は地上での生涯において成し遂げてくださいました。

その上で、キリストは罪のない状態で逮捕され、死刑判決を受け、十字架で苦しみ、死を遂げられました。この十字架の死こそが、わたしたちの罪、いやわたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を贖ういけにえです。キリストを救い主として信じるすべての人の罪を、御子は十字架の苦しみと死において担ってくださいました。

Ⅲ　神を知ることこそ、信仰の第一である

創造主であり統治者である父なる神、救済主イエス・キリスト、そして聖霊をとおして今も私たちは神と共にあり、命が与えられて、罪が赦されて、天国における永遠の祝福の希望に満たされ、神の栄光を誉め称え、喜びの内に生きるものとされています。

私たちは、職場では上司の命令に服従することが求められます。学校では先生に聞き従うことが求められます。職務違反を行えば辞職が迫られることもあります。だからこそ皆、大変な思いをもって聞き従います。上司や先生と、主なる神とどちらが偉いのか？　創造主であり、私たちの罪を贖ってくださった御父・御子・御霊なる神と比べることなどできません。私たちは神が求めておられることに聞き従わなければなりません。主は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マタイ二二章三八節）、「隣人を自分のように愛しなさい」（同三九節）とお語りになります。

「廃れない主の掟」　ヨハネの手紙一　二章七～一一節　　二〇一二年一二月二日

Ⅰ　新しい掟

新しいことが与えられると新鮮さを感じます。教会においても新しいことを行うことが求められます。一方、新しい教えが広がりを見せる時、注意しなければなりません。この手紙は、ＡＤ九〇年頃エフェソにおいて記されたと考えられていますが、この当時、ローマ・ギリシャを中心とした地域に、グノーシスという思想が盛んに唱えられており、その影響が、キリスト教会の中にも入ってきていました。

グノーシスはギリシャ語で「知識・知恵」を意味しますが、「人間はグノーシス（知恵）を持つことによって救われる」と言われていました。たとえば、人間の起源・本質・未来はどうなっているかといった根本的な問題についての解答としてグノーシスを持つことが求められました。元来は哲学的な思想ですが、教会にも入り込んできたのです。つまり、グノーシスをもたらすのがキリストであり、それを霊的直観によってとらえるように教えました。グノーシスを得ることによって、人間は霊の世界の無知から解放され、不死を得て救いがあると考えられました。

ヨハネは、キリスト教の真理がグノーシスのようなうさん臭い教えではないことを主張しつつ、キリスト教の真理を再確認するようにと主張します（二章七節）。ここで注意しなければならないのは、通常新約聖書が「古い掟」と語れば「旧約聖書」を指しますが、ここではグノーシスに対する「古い掟」としてのキリストの教えのことです（二章六節）。では具体的に古い掟とは何か？　「あなたがたも互いに愛し合いなさい」です（ヨハネ一三章三四～三五節）。キリストの愛は、十字架において頂点を迎えますが、洗足（同一三章一四～一五節）やサマリア人への譬え（ルカ一〇章二五～三七節）で示されています。

キリストの教えは、十戒の第二の板（第五戒～第十戒）の要約そのものです。ヨハネは、

これが恒久的力を持っていると語ります。キリストこそが、闇の中にいた私たちに光をお与えてくださいました。グノーシスが語るように、何か難しいことを学び、知恵を付けたら、より神を知ったように思うかも知れませんが、それはまったくの間違いです。

しかしこのグノーシス的なことは、現在もはびこっています。原子力発電所の問題も然りです。今まで社会は、最先端の科学技術である原子力発電所だから、中身は分からないが、賢い人たちが行っているから大丈夫だと思ってきました。しかしここに多くの嘘が隠されてきていたことが明らかになっています。クリーンエネルギーと言われてきました。しかし実際には、多くの被爆労働者を出し、彼らを使い捨てにしてきています。声なき声があります。ここに人権などありません。多くの犠牲の上に、原子力発電がまかり通っています。また、核燃料サイクルにおいて、永久にウラン燃料をサイクルして用いることができるように言われてきました。しかしそれは極一部、一回限りしかサイクルできず、さらに多くの核廃棄物・放射能を出し続けていくことが明らかになっています。そしてこの核廃棄物は、一〇〇万年単位で保管し続けなければ安全は確保されません。偉い人が作ったシステムだから、偉い人が大丈夫だと語っているシステムだから安全だと思い込んできたのであって、これは疑わしい新しい掟としてのグノーシスそのものです。

Ⅱ　光の中を歩む

私たちが考えなければならないことは、隣人に対する愛があるかどうか、つまり労働者の安全が確保されているか、事故が起こった時に周辺に住む人々の安全が確保されているか、残された核廃棄物に対して将来に生きる人たちに対する安心が確保されているか、そのことを問いかけなければなりません。しかし現実には、電気の安定供給、電気料金が安いといった経済的なことを語りつつ、一番大切なことを議論しようとしない人々が多く、そうした人々が政治を行っています。私たちは難しいからと議論を避けていてはダメです。互いに愛し合うこと、それは何も訳の分からない新しい教えではなく、昔ながらの掟です。ここにこそ、イエス・キリストによる光があり、真理があります。

私たちは理解できない科学技術や、一見真新しそうに聞こえるキャッチコピーに踊らされてはなりません。科学技術は主が私たち人間にお与えくださった恵みです。すべてを否定するものではありません。しかし、主の真理、まことの光の輝きである掟に照らして、闇の部分、うさん臭い部分がないか私たちは確認し、闇を取り除く働きを続けなければなりません。聖にして義の基準をお与えくださったキリストが、すでに私たちの所に来られました。キリストが、この世での歩みを遂げられ、私たちに生きていく模範を示された後、十字架の死を遂げてくださいました。キリストが、私たちの持っている罪を背負われ、十字架にお架かりくださいました。

キリストは、人を愛し、人を生かすために来られ、人に仕えてくださいました。そのキリストが、「私に倣いなさい」とお語りくださいます。私たちは互いに愛し合うことができたから救われたのではありません。「兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません」（二章一〇節）。これは、いつも光の中にあるからこそ兄弟を愛することができるのです。

「若い人たちへ」　ヨハネの手紙一　二章一二～一四節　　二〇一二年一二月九日

序

日本社会もですが、日本の教会も高齢化し、弱体化しています。主は生きて働いておられ、私たちを支配しておられますが、主は私たち日本人キリスト者に何を求めておられるのか。主なる神の御前に立ち、一人ひとりの信徒が主の御前に畏れを抱き、教会が一つになることが求められています。

Ⅰ　主の御前に生きるキリスト者

私たちを救いに導いてくださる神は、私たちの罪を赦してくださる愛の神です（一二

節）。私たちの行い・信仰ではなく、まず主が私たちを選び、主イエス・キリストの十字架の御業の故に、「あなたの罪は赦された」と宣言し、私たちを神の子としくださいました。そしてキリストの十字架によって私たちの罪は赦され、神の愛が示されました。

しかし私は最近思います。「今のキリスト者は、この神の愛に甘えているのではないか」と。つまり、主は全地万物を創造し、私たち人間を創造してくださったお方です。主が創り主であり、私たちは主の被造物です。主の御前にひれ伏すことが求められています。しかし、私たちキリスト者にとって、神の存在が非常に小さくなっているのではないでしょうか。なんだかお友だちか、祈りを聞き遂げなければならない家来かのようにです。それは、牧師を含めて、多くの人たちが日々の生活に追われ、主の御前にひれ伏し、主の御声に聴く時間が非常に短くなっているからです。

私たちは、日々呼吸し、水を飲み、食べ物を食べています。私たち人間は肉において生きるように霊において生きなければなりません。つまり霊の呼吸としての神との交わり、祈り、霊の水である御言葉と聖礼典、肉の糧としての教理・信仰告白に学びが求められます。神の御前に生き、神によって霊的な成長が与えられる時、私たちはキリスト者として、歩み続けることができます。

Ⅱ　すべてのキリスト者への呼びかけ

さて聖書は、「子たちよ」、「父たちよ」、「若者たちよ」と語ります。年齢順ではありません。「子たちよ」とは「神の子たち」つまりキリスト者全員を語っています。それに対して、「父たち」、「若者たち」とは、年齢順であり、言い換えれば「信仰の養いを受けてきた教会役員として働いている者」と、「まだ信仰の浅いこれから信仰生活の養いに与っていく者」のことを語っています。

そして神の子たち、すなわちすべてのキリスト者は、信仰を告白し、主からの召命が与えられ、義とされ、子とされており、罪が赦されています。私たちは主の御前に立ち、隣人の前で、日々、様々な罪を犯し、滅びに向かっていたことを受け入れ、悔い改めなければなりません。つまり創造主であり、救い主である神を知ることと、主による罪の赦しを受け入れることを、信仰者は第一にしなければなりません。

Ⅲ　父たちへ、若者たちへ、そしてすべてのキリスト者へ

今の時代、「神は死んだ」とさえ言われ、多くの人たちが神の存在を受け入れない世俗主義が日本全体を覆っています。こうした中、私たちキリスト者も、主の御前に立つ畏れ、主の裁きに対する恐れが薄れています。しかし、主は「わたしはある。わたしはあるという者」（出エジ三章一四節）です。永遠の神は、最後の審判と神の国の完成も約束してくださいます。だからこそ神の救いに喜びを持ち、神を礼拝することに熱心になります。

選挙では強い国をつくることが叫ばれています。強いことは誰にとってもあこがれです。しかしこれは一国中心主義です。私たちは何と戦うのでしょうか？　国と国との争い、人と人との争いは、罪の故に生じてきました。私たちが本当の意味で勝利を遂げなければならないのは、死・罪・サタンに対してです。神を信じることは、死と罪・サタンに勝利してくださったキリストの十字架の贖いを信じることです。神を信じ、神の国に入ることは朽ちない宝を手に入れることであり、キリスト者として最も大切なことです。

教会が成長していくためには、教会員一人ひとりが、いつまでも乳飲み子のようであってはならず、信仰の成長が与えられていかなければなりません。そのために、まず、私たちが何と戦っているのか、つまり、死・罪・サタンとの戦いであることを理解しなければなりません。その上で、常に御言葉と教理の養いに与り続けることが求められています。

「永遠に生き続ける信仰」　ヨハネの手紙一　二章一五～二一節

二〇一二年一二月一六日

今日、衆議院選挙が行われています。政教分離を盾に「教会は政治に対して何かモノを申すべきではない」と語る人もいます。しかし政教分離とは、政治が宗教に介入し支配しないように求めているのであって、キリスト者の立場から、生活、強いては政治が良くなるように発言していくことは必要なことです。主が求めている平和を実現するため、憲法第九条や第二〇条の信教の自由を変更しようとしている党を支持すべきではありません。また、何万年も廃棄物の処理を求め、危険を強いる原発を動かし続けてはいけません。

Ⅰ 「世」に対して

神は「世も世にあるものも、愛してはなりません」（一五節）と語ります。神は天地万物を創造され、そのすべてが素晴らしいものでした。そして神は、人間に神の栄光を称えて礼拝し、すべてのつくられたものを管理することを求められました。しかし人は、罪を犯し、神から離れました。この神から離れた人たちが形成しているのが「世」です。彼らに対して、主の教えを語り、キリスト者の立場を示していかなければなりません。そのため私たちが彼らの生活を愛し、彼らの生活に入っていくことはしてはなりません。

Ⅱ 「世」を愛さない理由

つまり、私たちキリスト者は、主イエス・キリストの十字架の贖いにより罪赦され、神の子にされました。神から離れ、罪の内にある「世」とは大きな隔たりがあります。「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」ません（マタイ六章二四節）。私たちは光である神に属し、闇である世に属する者ではありません。

また世の者は、神の栄光を現すことはなく、「肉の欲」、「目の欲」、「生活のおごり」を求めます。具体的に「肉」とは、罪の性質であり、十戒の後半で、次のように記されています。⑥殺してはならない。⑦姦淫してはならない。⑧盗んではならない。⑨偽証してはならない。⑩隣人の家をむさぼってはならない。実際に罪を犯そうとすることが、

肉の欲であり、人間の持っている罪から発せられる欲望から生じてきます。

肉の欲だけですと「私はそのようなことはしない」と語られるでしょう。しかしヨハネは続けて目の欲と語ります。ウェストミンスター小教理問答　問八二は、次の様に語ります。問「神の戒めを完全に守れる人が、だれかいますか」。答「ただの人は、堕落以来、この世では、だれも神の戒めを完全には守れず、日ごとに思いと言葉と行ないにおいて破っています」。罪を犯すことだけではなく、言葉において、さらに心の中で思うだけでも神の御前には罪です。

第三は生活のおごりです。世の人々はブランドを求めます。ブランド品を買うこと自体が悪いことではありません。良いものを、愛し、長く用い続けることは良いことでしょう。ブランド品は、技術的にも美的にも優れているものが多いからです。しかし、「ブランド志向」と呼ばれることの問題は、モノをモノとして本来ある目的に用いることを主体にするのではなく、モノを持つこと自体に主体が移り、それを自己目的化することが問題です。

この様な、「肉の欲」「目の欲」「生活のおごり」は、世から出たものであり、罪の支配の中にあり、御父から出たものではありません。だからこそ、私たちはどのような時にも、信仰の目をもって判断しなければなりません。常に主のお語りになる命令、つまり御言葉に聞き続け、主の御前に祈りつつ、世にあって生きていかなければなりません。

Ⅲ 世は一時的である

「世も世にある欲も、過ぎ去って行きます。世のものはいずれ朽ち果て、天国に持っていくことはできません」（二章一七節）。言い換えるならば「世」は「闇」であって、この闇の世界に「光」を照らしてくださるのが主イエス・キリストです。キリストの十字架の贖いによって救われた者は、すでに永遠に生きる者に変えられ、この世のモノに執着する必要はなくなりました。

しかし「世」にあって存在する教会もまた、「世俗化」します。私たちは「改革派教会」と名乗っています。日々、御言葉によって改革され続けなければなりません。それは、

「世」に染まることなく、御言葉に生き続け、御言葉を実践し、救いの喜びに生き、神を礼拝し続け、祈り続ける民であり続けることです。キリストの十字架によって、罪赦され、永遠の生命が与えられた者として、感謝と喜びをもって、日々主に仕えて歩み続けよう。

「反キリストが現れる時」　ヨハネの手紙一　二章一八～二七節

二〇一三年一月六日

Ⅰ　キリスト者として、日々大切にしなければならないこと

今日の説教題は「反キリストが現れる時」です。年始めから物騒な題です。しかし異教社会に生きる私たち日本人キリスト者は、現実から目をそらせてはなりません。私たちの周りには、直接・間接にかかわらず、キリスト教を否定し拒絶している人々がいます。神を信じ、主の御言葉に聞き従う時、必然的に世の人々との間に違いが生じます。

「あなたがたは聖なる方から油を注がれているので、皆、真理を知っています」（二〇節）。「油注ぐ」とは、旧約の時代であれば、王・預言者・祭司に対して行われ、新約の教会でも、牧師・長老・執事は、按手において油注がれ、主の働き人とされます。しかしここで語る油注ぎは、すべてのキリスト者に与えられるものであり、聖霊に満たされることです。私たちは聖霊をとおして御言葉に聞くことにより、主の真理を知り理解することができます。

つまり私たちが聖書を読み理解することは、単に知的に理解することではありません。もちろん知的に調べ、知る必要があります。しかし同時に聖霊が宿ることにより、聖書に記されている主の御言葉を真理として理解し、聖書を読む私たち自身が真理に従う者へと変えられていきます。つまり私たちは聖霊に委ねつつ、主の御言葉に聞き、主なる神御自身のことを知ること、主のお語りになる真理を知ること抜きには、真のキリスト者として、

主を礼拝し、祈り続ることもできません。これはキリストから油注がれ、神の救いに入れられた者の特権です。神のために時間を割き、御言葉に聞き、祈る時、主はさらなる祝福をお与えくださいます。私たちは第一のものを第一としなければなりません。

Ⅱ　聖徒の交わりに繋がる信仰

一方偽り者は、「イエスをメシア（キリスト、救い主）である」ことを否定します。言い換えれば、三位一体なる神を否定します。「三位一体」という言葉は、聖書に直接記されておらず、教会が告白してきた教理です。教会は聖書のみで教理は不要と言われる方々もいます。しかし新約の歴史の中、御子イエス・キリストの神性、あるいは聖霊の神性を否定する人たちが生じてきた時、キリスト教会は、聖書を読み解く結果、御父・御子・御霊なる神を信じて、そのことを「三位一体」という言葉をあてました。そして三位一体を否定する人々を、聖書的ではない者たちとして、教会から排除し、彼らのことを異端としました。教理（使徒信条、ウェストミンスター信仰告白・大・小教理問答など）は、その時その時のキリストの教会が、聖書を読み解き、聖書が語る真理を告白してきた言葉です。三位一体とキリストの二性一人格の教理は、異端と区別するための重要な教理であり、使徒信条やニケア信条、アタナシウス信条、カルケドン信条の古代教会において告白してきたものです。そのためこれらの基本信条は、キリスト教会の教派を超えて、一致することができ、異端と区別するための教理となっています。

そして三位一体なる神を私たちが信じる時、私たちは御父の救いのご計画に組み込まれ、キリストの十字架の贖いに与り、聖霊の豊かな交わりの中に入れられています。そのためキリスト教会は、教派を超えたキリスト者の豊かな交わりにあります。私たちはウェストミンスター信条を告白した改革派教会を立て上げて行きます。しかしキリスト者の少ない日本の教会において、教派の違いばかりを強調しても仕方がありません。むしろ、三位一体なる神を信じるキリスト者として、神の救いの恵みと祝福に入れられていることを確認する時、私たちは教派を超えた交わりも豊かになります。家庭・学校や職場、地域のつな

がりも大切です。しかし、私たちが最も恵みに満たされる信仰の交わり、聖徒の交わりが本当の意味で豊かでなければ、信仰の養いも豊かにはなりません。

Ⅲ　地上での主の恵みと天上での永遠の生命

また、私たちが御父・御子、御霊なる神との交わりに生きることは、罪の故に死に行く私たちがキリストの贖いの故に罪赦され、神の子とされ、救いの喜びに生きることです。そして救いの喜びに生きることにより、地上における日々の歩みの中、様々な苦しみ、悲しみ、悩み、試練に置かれたとしても、生きて働く神の御手の中にあり、主の守りと導きを信じて生きることができます。自分一人で頑張る必要などありません。御父・御子・御霊なる神が私たちと一緒にいてくださいます。

そして私たちは、地上の生涯を走り終え、肉の死の時を迎えたとしても、主は私たちに復活の生命をお与えくださり、天国における永遠の生命に満たしてくださいます。

「油注がれる祝福に生きる」　ヨハネの手紙一　二章二六～二九節

二〇一三年一月一三日

Ⅰ　私たちは神の子である

私たちを救いに導いてくださった神は、「安息日を覚えて聖とせよ」と命じられ、主の日（日曜日）に神を礼拝することを求めておられます。しかし私たちは日曜日に礼拝に出席している時だけキリスト者ではありません。キリストの十字架の贖いによって罪が赦され救われ、神の子ども・所有物とされたのであって、家庭・職場や学校でも、サークルや趣味の場・地域の交わりにあっても、キリスト者です。子どもは親の教えを守ることが求められるように、常に神の子どもとして相応しい生活が求められます。そして神を信じていない人々とは、ものの考え方・判断が異なってきます。これが「信仰生活」です。「生きる」とはキリスト者として、神の恵みに生きることであり、主の御言葉に聞き、主の御意思を知り、行動することがキリスト者です。

しかし私たちは、教会の中、キリスト者同士の交わりだけでは生きることはできません。キリスト者を惑わし、攻撃・迫害してくる人々もいます。日本は神を知らない人々の方が圧倒的多数で、キリスト者はわずかです。神の御言葉に従って生きようと心がけても、知らず知らずの内に神から離れ、世の規準で物事を判断し生きてしまいます。私たちキリスト者は、そうであってはならず、意識して神の御言葉に従い、神の求めに従った判断を行いつつ、信仰生活を営んでいくことが求められています。

Ⅱ　聖霊の力を信じよ！

しかし、私たちは弱く罪深いため、誘惑に流され、惑わされ挫けてしまいます。信仰の戦いが強いられます。しかし自分一人で頑張ってもいけません。むしろ誘惑に負けてしまう自分がいることを認めなければなりません。神の御言葉に聞くことなく、神を忘れ、世の人々と同じ生活を行ってしまう自分を知らなくてはなりません。こうした弱く、神の御前に罪深い私たちを、神は、キリストの十字架の贖いにより、一方的に救い、神の子どもとして受け入れてくださいました。私たちは、一生懸命になること以前に、自らの弱さを受け入れ、主の御前に自らの罪を悔い改め、神の救いに感謝することが求められています。

神は私たちに油（聖霊）を注いでくださいました（二七節）。私たちは、キリストを直接目で見ることはできません。しかし生きて働く主なる神の霊である聖霊は、今も私たち一人ひとりに働いていてくださいます。つまり、私たちを惑わす者・サタンの力・迫害者を私たちは恐れますが、それは人間的な恐れです。自分で戦わなければならないと思うからこそ恐ろしいのです。防御しようとするから攻撃的になります。神の救いに入れられている私たちには、御子から油注がれた聖霊なる神が共にいてくださいます。聖霊の力を信じない・聖霊を信じ切れていないから、恐れ・構え攻撃的になります。

私たちが信じている父なる神、御子なるイエス・キリスト、そして聖霊なる三位一体な

る神は、全知全能です。力を持っておられます。このお方が共にいてくださるのであれば、何も恐れることはありません。サタンは神の許しがなければ働くことができません（ヨブ記一・二章）。神が私たちを守ってくださいます。聖霊なる神が共にいてくださることをはっきりと確認し、信じる時、私たちはどこにいても恐れる必要はありません。

すでにキリストは、十字架の死と復活をとおして、罪に打ち勝ち、勝利を遂げてくださいました。神の子とされることは、キリストに属し、世において恐れるものはありません。

そして神は、私たちの信仰を最後まで守り、確実に神の子として、天国での安住の地に導いてくださいます（聖徒の堅忍・ウェストミンスター信仰告白第一七章）。

Ⅲ　聖霊派に対する注意

ただ私たちはここで一つ注意しなければならないことは、聖霊にすべてを委ね、聖書から離れることです。聖霊派の人々は、聖書も用いますが、重要視しません。むしろ祈り、聖霊が宿ることを求めます。異言が与えられることが、信仰の成長の証しと考えます。つまり彼らの論理からすれば、神の啓示は、主イエスと初代教会までは、聖書において与えられたが、それ以降は聖霊がすべてであると考えます。しかし聖霊のみに頼ることは、危険です。主の御言葉から離れた聖霊の宿りは、個人的・主観的な信仰になります。

私たちは御父・御子・御霊なる三位一体なる神を私たちは信じているのであって、御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。私は前回、聖徒の交わりが大切であることを語りました。信仰は個人的なものではなく、信仰共同体・聖餐共同体です。御子がお示しくださった聖書の御言葉が規範として与えられています。

また御子を信じることは、肉となったイエス・キリストの地上におけるすべての御業を受け入れることでもあります。御子を受け入れるとは、言（ロゴス）をも受け入れることであり、御言葉としての聖書を受け入れることでもあります（ヨハネ一章一～五、一四節）。聖書を横に置き、聖霊にのみ委ねることを、私たちはしません。だからこそ、ウェストミンスター信仰告白第一章「聖書について」五節では、次のように告白します。「聖

書の無謬の真理性と神的権威に対するわたしたちの完全な納得と確信は、御言葉により、御言葉と共に、わたしたちの心の中で証しなさる聖霊の内的御業による。」

私たちは、キリスト者として「いつでも霊的に判断し、霊的に語り、霊的に行動しよう」とする時、日々、御言葉である聖書に聞きつつ、聖霊により、主が共におられることを忘れてはなりません。御父・御子・御霊なる神は、生きて働く神であり、力があります。自分で何とかしようとするのではなく、常に、祈りつつ、聖霊によって答え、判断が与えられ、神の守りがあることを信じて、日々、歩み続けていきましょう。

「神の子とされる祝福」　ヨハネの手紙一　二章二八節～三章三節

二〇一三年二月三日

序

皆さんは、「私はクリスチャンである」、あるいは「私は神を信じて、救われている」と語る時、「救われるとはどういうことなのか」と考えたことがあるでしょうか。

Ⅰ　私たちは神の子

日本人クリスチャンの中には、「信仰とは心の問題である」と考えておられる方も多くあります。そのような人は「自分は神を信じている」、「主イエスを救い主として信じているからクリスチャンである」と語ります。このように信仰を心の問題と捉えると、「自分は神を信じているからこれでよい」となり、自分でどのような信仰生活を送るのかを判断します。そうすれば、聖書を読むことも、教会に来ることも、自分ができる時に行い、必要ない時、生活が満たされている時には求めなくなります。

しかし、信仰とは、心の問題、私たち個人の問題ではありません。神は、私たちに対してどのように語りかけてくださっているのでしょうか？　「子たちよ」です。私たちは

「神の子」であり、神が、私たちの父親としていてくださいます。つまり、法的・契約として、私たちは神の子とされており、私たちの全生活・存在に関わることです。

親は子どもを養育し、守る責任が伴います。だからこそ、神が私たちの父親となってくださるのであれば、私たちは常に神によって守られています。私たちは常に神の御前に生きることを忘れてはなりませんが、そうであるならば、私たちは神の御前で甘えることもできます。それが祈りです。神は私たちと常に一緒におられ、そして守ってくださいます。そして必要を満たしてくださいます。こうした関係がある時、相談し、助けを求めることもできます（参照・マタイ七章七～一一節「求めなさい。そうすれば、与えられる。……」）。

しかし、神の子どもとされ、神が共にいてくださり、神の守りの内にあるならば、それは同時に義務も生じます。家庭毎に子どもに課せられた義務があるようにです。なぜならば、神は真の義・真の聖・真実な方だからです。子どもは大人を、そして親を見て、真似て、成長します。私たちが本当に神の子どもとして、喜びを持って生きようとする時、親である神に学び、真似、近づこうとします。だからこそ、私たちは、聖書に聞き、神の真意を知り、真似ようとすることが求められています。

Ⅱ　私たちを神の子としてくださる神の愛

しかし、私たちを子としてくださった神のことを、私たちが本当の意味で知らなければ、神の子どもとなっていることの祝福、恵みがどれほど素晴らしいものであるかも理解することはできません。「親の心、子知らず」です。ルカ一五章一一～三二節に放蕩息子の譬えが記されていますが、弟は全てを失った時に初めて父の愛に気付きます。しかし兄は、最後まで父の愛に気付くことすらできませんでした。

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい」（一節）。私たちは神の子とされました。神と等しい身分、「アッバ、父よ」と呼ぶことができる身分が与えられました（参照・ローマ八章一五～一七節）。親子であれば、すべての相続をも受け取ることが許されます。私たちが神を信じて、クリスチャンとなることは、今も神が共にいてくださり、祈りを聞き届けて、私たちを守ってくださる神であることを知ることができます。それと共に、神の子として天国（神の国）のすべての祝福をも、与えられる喜びに満たされています。

さらに私たちは、私たちが神の子となるために、父なる神は、御独り子、主イエス・キリストを人としてこの世にお遣わしくださったことも忘れてはなりません（参照・フィリピ二章六～一一節）。神は、私たちを神の子どもとしての恵みと祝福に入れてくださいました。それは御子の十字架による死という、大きな痛みを伴ったものでした。神は、独り子である主イエスを十字架の死に渡してまでも、私たちを救い、神の子どもとしてくださいました。なぜならば、私たちが神によって救われなければ、私たちが死ぬからです。罪の刑罰としての滅びが待っているからです。罪のない、真の神である御子が罪の刑罰を支払い、私たちを贖ってくださらなければ、私たちを救うことができなかったからです。私たちは、この神の愛、御子の犠牲が示されています。親の心、子知らずで良いのか、ということが問われています。

Ⅲ　聖徒の堅忍

さらに、ヨハネは語ります。「愛する人たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのまま見るからです」（二節）。驚くべきことが語られています。私たちは御子が再臨された時、私たち自身が御子に似た者にされます。これこそが、神の義・聖・真実が与えられることであり、神の御国における永遠の生命の祝福が与えられています。完全聖化です。ここには罪はなく、また苦しみも、信仰の戦いも、死もありません。主が勝利を遂げてくださったからです。

これは信じ続ければ与えられるというような、希望的な観測ではありません。「わたし

たちは、今既に神の子」です。信じれば救われるのであり、それは神から一方的に与えられた恵みです。そこから外れることはありません。落ちないように努力しなければならないと、強迫観念を持ちつつ、信仰生活を送ることもありません。聖徒の堅忍とよばれますが、神を信じて救われた者は、必ず、神の救いに入れられ、神の国の祝福に入れられます。

私たちは、今から聖餐の礼典に与りますが、私たちが聖餐の礼典に与ることは、私たちがすでにキリストの十字架によって罪が赦され、神の子とされていることを確認しつつ、さらにキリストが神の御国の完成時に私たちをお招きくださる天国の主の晩餐に与る希望が与えられています。だからこそ、私たちは安心して、神を信じ続けることができます。世にあっては様々な信仰の試練、戦いが強いられます。しかし神の愛と御子の犠牲によって、私たちは神の子とされる祝福に入れられています。世における戦いは一時に過ぎません。救われていることの本当の祝福を私たちは御言葉から示され、信仰を守り続けていかなければなりません。

「罪を犯す者は悪魔に属する」　ヨハネの手紙一　三章四～一〇節

二〇一三年二月一〇日

序

生きて働く主なる神の御前に生きる私たちは、主による救いを考える時、同時に主に従わない時に神の裁きがあることを避けて忘れてはなりません。

I　罪による裁きと、御子による救い

人は、生まれながらに罪人であり、神による救いがなければ、罪の故に主により裁かれます。主なる神が、アダムとエバに最初に約束（生命の契約）を結ばれ（創世記二章一七節）ましたが、アダムとエバは罪を犯し、死ぬ者となりました。そして彼らから生まれる

すべての人も、生まれながらに死ぬ者（原罪）であり、毎日の生活においても罪を犯します（現行罪）。つまり行い・言葉・心の中で神がお教えくださった律法（十戒）を守ることができず、罪を犯して、死を避けて通ることができません。

「教会が滅びを語ると、人々のつまずきとなる」と言われる方もあるかと思います。事実、改革派教会において信じています予定の教理は、非常に不評です。予定とは「神は前もって救われる者をお選びくださっていた」ことを語りますが、批判する人たちは、「では、神は滅びる人たちも定めておられたのか」と語ります。

しかし誤解してはなりません。神は、滅び行く私たち人間を救うために、救いの計画を立て、救ってくださいました。予定の教理は、このことを確認しています。「罪を犯す者は皆、法にも背くのです」（四節）。生まれながらの全ての人に当てはまることです。人となられた主イエス以外に誰も例外はありません。誰一人例外なく、罪人として滅びます。つまり、神は人を滅びるように定められたのではなく、本来滅びるべき人を、主は救いに計画し救ってくださったのです。私たちが今、教会に来て、神を礼拝するのは、まさに神が救いに招かれているからであり、神から与えられた一方的な恵みが示されています。

人々が神を信じないのは、滅びの恐怖を知らない、忘れているからです。一昔前、人々は貧しさ、疫病、飢饉、災害、戦争など、人々を恐怖に思わせることがあり、何とかそこから逃れたい、救われたいとの思いで、救いを求めました。しかし現在はそうではありません。生活が豊かになり、他人の死に出会うことも少なくなりました。疾病も多くの場合原因が分かってきて、目に見えない恐怖もなくなっています。そのため教会で主による裁き・滅びを語らなければ、人々が現実に目を向けることから遠ざけ、本当に必要な救いを求めるきっかけを失っています。しかし、罪の刑罰としての滅びは存在します。そしてイエス・キリストを信じることにより救われます。これが福音です。ここに神の御力が示され、私たちは主の御前に生きる時、畏れをもって主を崇め、主を礼拝することが求められています。

Ⅱ　神の子として生きよう！

「罪を犯す者は悪魔に属します」（八節）。「神から生まれた人は皆、罪を犯しません」（九節）。両極端です。私たちはキリストの十字架の贖いにより罪が赦され救われました。しかしこの世においては罪赦された罪人であり、日々主の御前に罪を繰り返します。私たちは九節をどのように解釈すれば良いのでしょうか？　私たちはすでに神の子です（三章二節）。神は私たちが罪を犯し失敗したから、「ダメだ、勘当する」とは語られません。完全に聖化するのは天国に入る時まで待たなければなりません。だからこそ、今なお、私たちは罪を繰り返します。

しかし、私たちは神を知らない人たちとは根本的に違います。すでに神の子とされ、罪の赦しが与えられています。神に背を向けて歩んでいた者であったのに、一八〇度方向転換して、神を信じ、神に従って生きる者へと変えられました。キリストの十字架による罪の赦しを信じ、神の子として、律法に従って生きようとすることが大切です。「神の種」（九節）が私たちの内にあるとは、このように生きることです。罪を犯し失敗を繰り返しますが、なおも神に向かって歩み続けることを神は良しとしてくださいます。

神の子たちと悪魔の子たちの区別は明かです（一〇節）。もちろん、神を知らない人たち、信じていない人たちにも、立派な人たちはたくさんいます。しかし、神を信じて、神の律法に従って善き行いをしようとすることと、神を信じていない人が一般的な規準で立派な生活を行うこととは、根本的に違います。

「イエスの愛、隣人への愛」　ヨハネの手紙一　三章一一～一八節

二〇一三年三月三日

序

聖書は「互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです」（三章一一節）、「愛する者たち、互いに愛し合いましょう」（四章七節）と語ります。神は私たちを愛し救うために、御子イエス・キリストを十字架に献げてくださいました。そして神の愛が示された私たちキリスト者は、神を愛し、隣人を愛することが求められています。

Ⅰ　罪人と神の罪の赦し

しかし、私は今、自分の姿を顧みた時、人を愛せない自分がいます。どうしても自分が中心になり、苦しんでいる人がいても手助けすることができません。震災の被災者についても同様です。これで本当にキリスト者であるのかとさえ、思います。

しかし主は「信じる者は救われる」とお語りくださいました。そして主を信じる私たちは、主により罪が赦され、神の子どもとされました。私たちは主の求めておられる義を貫くことはできません。そのため互いに愛し合うことが求められても、私たちには完全に行うことは不可能です。しかしカルヴァンは「神は信者たちの過ちや罪を負わせられないから、この中途半端な不完全な神への服従も義と呼ばれるのである」と語ります。慰められる言葉です。

ただしこの不完全さは、神がお示しくださった律法を守ろうとしないこと、破ろうとすることとは異なります。主が見ておられるのは、神を礼拝する心、神に従おうとする心を問うておられるのであって、形ではありません。つまり言い換えますと、神によって救われていることをはっきりと受け止め、感謝と喜びをもって生き、神を礼拝し、人々を愛し、仕えることが求められており、同時に、救い主イエス・キリストの十字架と出会い、救いの喜びに生きることです。

Ⅱ　人殺しである私たちに与えられるキリストの十字架

他人に悪口を語ること、嫌だと思うことは肉の弱さであり、本来、罪に属する者の行うことです。「兄弟を憎む者は皆、人殺しです」（一五節）とも語られています。第六戒違

反です。

それにも関わらず、神は今のままの私たちを良しとしてくださり、神の子として、救いに入れてくださるのは、御子の十字架の御業の故です。神の愛、神による罪の赦し・救いは、神の自由な意志、無償の恵みです。私たちが今までに犯してきた罪も、神に従おうとしても完全に従うことのできない罪も、また心の中で他人を憎んだり、蔑んだりする弱さも、死に値することですが、キリストの十字架によって私たちの罪は贖われました。だからこそ、私たちはキリストの十字架・キリストの愛に出会わなければなりません。

神の愛が示された時、私たちは世に属し続けることはできません。神を愛し、神を礼拝する者とされ、神の律法に従う者とされます。そして、神が愛してくださった隣人を愛する者となります。キリストの十字架と出会うならば、キリストが自分の罪を赦してくださったように、相手の罪・弱さを受け入れることができます。主の祈りも次の様に祈ります。「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」。

Ⅲ　教会を作る愛

ですから教会では、赦し合い・互いの弱さを担い合います。教会はキリストの体として譬えられます（ローマ一二章四～六ａ節）。このことが聖徒の交わりとして、教会を強くし、成長させます。教会は、キリストにより、神の愛によってつながり、神の国に向けての共通の救いの希望を持っている者たちの共同体です。私たちは自らの強さを誇る必要はありません。強さ・勝利はキリストの十字架によって与えられます。私たちに必要なことは、自らの弱さ・罪を見つめ、悔い改め、人々に対して遜りと謙遜をもって仕えていくことです。弱さを非難し、裁き合う時、教会は、キリストの十字架が隠れ、人間的な交わりに成り下がってしまいます。

そしてキリストの十字架、神の愛、罪の赦しと救いの希望に生きるキリスト者は、聖徒の交わりと共に、世の人々にも奉仕します。これが愛の業、ディアコニアです。互いに愛し合い、聖徒の交わりが豊かな教会がディアコニアを行う時、力があふれ出ます。大震災

のために、改革派教会でも、愛の業が続けられています。そして私たちはこれらの働きのため、祈りと献げ物で参与することができます。

キリストの愛に生きる者は、教会において、教会を超えて、愛の業を行う者とされます。私自身、弱さを覚えます。しかしそれでもなお、神の愛が私たちに示され、私たちも神の民として生きる者とされています。悔い改めと遜り、謙遜をもって、主なる神に、そして周囲の人々に仕え、互いに愛し合う生活が、私たちに求められています。

「神の御前に安心して生きる」　ヨハネの手紙一　三章一九～二四節

二〇一三年三月一七日

Ⅰ　不安のない生活を送るには

安心して生きることを誰もが求めます。しかし今の日本では、働くことにおいて不安定であり、先が見えません。そのために、お金が稼げる仕事をしなければならない、と語る人も多いでしょう。しかし、自分や家族の生活、自分や家族だけが豊かになることを求めることは、キリスト者に相応しくありません。主なる神は、あなたを愛してくださるように、隣の貧しい者も愛していてくださいます。そのため、金持ちの青年に対しては、主イエスは、持っているものを売り、貧しい者に与えるように求められます（マタイ一九章）。

人は、将来が見通せないと、安心して生きることはできません。そうした意味では、すべての人々が豊かな生活を送ることができるようにする政治の役割は大です。そのために政治家は市民のために働きます。政治家に求められることは、選出された地域を統治することですが、主が求めておられることは、隣人を自分のように愛することであり、全世界の人々を対象としなければなりません。神を信じ、隣人を自分のように愛することができるキリスト者が、キリスト者の立場で政治を司る立場に立つことは非常に必要であり、重

要です。

Ⅱ　神の子である安心

しかしヨハネは語ります。「わたしたちは自分が真理に属していることを知り、神の御前で安心できます」（一九節）。つまり、安心・平安に生きることができるのは、仕事が安定しているからでも、政治が安定しているからでもありません。これらはこの世における一時的な安心に過ぎません。主が語られる安心は、将来的に変わることのない安心です。たとえ仕事がなくても、病気でも、被災して住居を失っても、飢えで苦しんでも、戦乱の中にあっても、キリスト者は安心に生きることができます。もちろん、神を信じたからといって、明日から生活が一変して楽な楽しい生活になるわけでもありません。むしろキリスト者であるが故に、迫害に遭い、生活の上では窮地に置かれている人々もあります。

キリスト者は、キリストの十字架の故に、罪が赦され、義と認められ、神の子とされ、永遠の生命の祝福に入れられています。つまり、罪人として、死の滅びの姿から、神の子として永遠の祝福の生命へと移されましたここにキリスト者としての安心があります。

永遠の希望があっても、現在の生活はどうなのかということを語られることでしょう。自分の力で生きようとするからこそ、どうにかしなければならないと思います。神は、わたしたちのすべてをご存じです。神が私たちと一緒にいてくださいます。必要なものをお与えくださいます（マタイ七章九～一一節）。そのために私たちは、神を信じて祈るのです。

イースターが近づき、キリストの歩まれた十字架の意味を私たちは顧みなければなりません。キリストは人として生きてこられ、十字架において手首、足首に釘が刺され、苦しみ、呻いておられます。私たちはこのキリストの姿を、リアルに感じる必要があります。その姿こそ、本来ならば、私たち自身が背負わなければならなかった罪の刑罰であり、滅び行く姿です。

この罪の裁きから救ってくださったのが、キリストです。キリストが私たちの身代わりとなってくださいました。そして神は、今も私たちと一緒にいてくださり、今、私たちに命を与え、食べるものを与え、住む家を与え、働き場もお与えくださっています。この神の動的な姿が、今、私たちに示されています。

すべてを御支配になられている神が、二年前、日本に震災をもたらされました。私たちが神を信じていると語りながらも、自分の力に依り頼み、本当に神を信じ、神にすべてを委ね、生きてこなかったことに対する罪の悔い改めが求められています。震災をとおして、人間の思っている完全は、神の御前には吹き飛ばされるような薄っぺらいものであることが示されました。私たちの信仰も問われています。

Ⅲ　信仰により神の民として生きる

私たちは、キリストの十字架の贖いによって罪赦されましたが、地上の歩みにおいては、罪赦された罪人です。空間的に有限であり、時間的に一部であり、日々変化する非常に小さな存在です。一方、私たちが信じている主なる神は、無限・永遠・不変の霊です。そのお方が、私たちに動的に関わりを持ってくださいます。私たちは、この主の御前に立つことが求められています。

「愛する者たち、わたしたちは心に責められることがなければ、神の御前で確信を持つことができ、神に願うことは何でもかなえられます」（二一・二二節）。私たちが心に責められることがないと思うことは不可能です。しかしイエスは言われます。「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない」（マタイ一七章二〇節）。

私たちは、すべてを主に委ねて祈ることはできません。しかし不完全であっても、主による救いに希望を持ち、委ねて祈り、主の御言葉を信じて行動する時、神に願うことは何でもかなえられます。そして、すべてを主に委ねる信仰が、神の掟を守り、御心に適うことを行う者へ、互いに愛し合うことができるようにと私たちを変えてくださいます。

結論

だからこそ、日々の生活で様々な不安があり、艱難・試練の中に置かれたとしても、私たちは、救いの希望に生きることができます。なぜならば、主は、私たちと共にいてくださり、霊をとおして働きかけ、私たちが信仰を失ったり、希望を失うことがないように支え、導いてくださるからです。主によって与えられた救い、天国における永遠の生命の希望に満たされて、日々の生活も、喜びをもって歩んでいきたいものです。私たちの日々の生活にある不安は、希望に満ちた救いの信仰の中に、包み込まれています。

「真実の霊と人を惑わす霊」　ヨハネの手紙一　四章一～六節　　二〇一三年四月七日

序

現在日本の教会では、新しい信者が与えられることが少なくなり、信仰の継承が問題とされています。しかしこのことは、キリスト教会のみならず、日本の宗教全体にいえることです。きっかけとなったのはサリン事件を起こしましたオウム真理教でしょうか？

Ⅰ　現代日本人の持つ宗教感覚

教会が嫌われるのは、キリスト教会が福音を正しく伝えてきていないことにも責任がありますが、同時に人々が表面的に宗教を覗き込み、「宗教は恐ろしい」、「何をやっているのか分からない」と言った判断をしているからでもあります。つまり人々は、自分の意志で趣味やスポーツを選り好みするように、神を選り好みし、神を信じるか否かの主導権を自分が持っています。宗教をとおして、自分の生活を充実させたいとの思いが人々にあります。そのため、自分たちの知識を超えて働く神の存在は受け入れられません。「神」と言いつつも、そこにある神観は知的に納得がいくものでなければなりません。つまり彼らの神観は、私たち人間の枠を超えた力を持っておられ、私たちに働きかける神を信じるという意識はまったくありません。宗教という名の自己啓発にすぎません。

Ⅱ　神の名を語る反キリスト

しかし聖書は語ります。「愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい」。つまり、私たちは、自分を超えて働く霊の力があることを受け入れることが求められています。

人々は、霊が語ることを受け入れることができず、「怪しい」として退けます。しかしここに真理があります。なぜならば「偽預言者が大勢世に出てきているからです」。多くの人々が宗教の名を語って、人々を洗脳し、金儲けの道具に、あるいは自分の語ることをすべて行う奴隷としてしまいます。ここには人間を超えて働く霊としての神の働きはありません。むしろ世を支配して、自らを神にしようとする支配欲が露わになっています。

しかし、宗教の名を語る偽預言者に人々が従わなくなったのは、人間が賢くなり、宗教に頼らなくても生きていけるようになったからではありません。偽物を偽物として気がつくことは大切なことですが、同時に、真理に近づくことができる手段すら失い、さまよっています。神の存在を否定し、神の霊の存在を否定する無神論の考えは、真理を見失わせます。これは悪霊・サタンの力であり、反キリストです。偶像・新興宗教のみが反キリストではなく、無神論にも反キリストの霊が働いているのです。

Ⅲ　死に対してあきらめている人々

多くの惑わしがあるため真理に見分けが付かなくなり、人々は頑なになっています。ではなぜ、人々は神を求めようとしないのでしょうか？　それは、人が「死」に対して無頓着になっているからです。死は誰もが避けて通ることができません。しかし、「死んだらおしまい」との悟りがあり、あきらめがあります。だからこそ、生きている時に楽しければ良いとの思いになるのです。死を超えて働く力などなく、それを超えて働く神を求めようとしません。

Ⅳ　神の招きを受け入れよ

しかし神を信じ、救いを求めることで、「死」で終わりではなく、復活があり、天国が

あることが示されます。ここに神によって造られた人間の本来の生きる目的があります。私たちが救われるために、キリストは十字架にお架かりくださり、私たちの贖いを完成してくださいました。この事実を、私たちは自分の能力で理解しようと思っても理解などできません。救いは、私たち人間が理解して獲得するものではなく、主なる神から与えられるものです。つまり神は、救おうとする人の所に来てくださり、招いてくださいます（二～三節）。主イエスは、漁師であるペトロたちの所に来て、「人間を取る漁師になりなさい」と語られ、彼らを弟子とされました。主イエスは徴税人であったマタイの所に来て「わたしに従いなさい」と語られました。彼は徴税人としての裕福な生活を捨て、救いを受け入れ、主イエスに従いました。主イエスは、目の見えない人を癒やし受け入れてくださいました。三九年もの間、寝たきりで、癒やしを求めていた人を癒やされました。主イエスが招いてくださる人は、主イエスの招きを受け入れ、主イエスに従う時、救いに入れられ、神の子どもとされます。

つまり「信じなければならない」ではなく、今、主イエスがお招きくださっている救いを受け入れることが求められています。自分の力で生きよう、目的を達成しようとしても救いを達成することはできません。できないからこそ、神に委ねるのです。それが信仰です。ここにイエスの霊が働いてくださいます。疑わしい、胡散臭いと思う頑なな心の扉を、イエスの霊である聖霊が開けてくださいます。だからこそ、堅い石になるのではなく、神に明け渡して頂きたいのです。神があなたを救うことができるのは、神が私たち人間の知識を超えて存在されるからであり、神が私たち人間に命を与え、救いに導いてくださるからです。

私たちが信仰に生きることは、私たちを招き入れてくださった神に委ねて生きることです。だからこそ私たちは祈ることができるのです。自分で頑張る必要はありません。すでに神を信じて信仰を告白している人たちはもちろん、まだ信仰を告白していない方々も、今、立ち止まり、神の求めに耳を傾けなければなりません。神は今、あなたを、罪の死から救い出し、神の子ども、天国で永遠に生きる者として招いておられます。罪の贖いは、キリストの十字架によってすでに完成しました。キリストを救い主と受け入れる時、あなたはすでに神の子とされています。私たちは罪の誘惑、サタン、偽預言者を恐れる必要はありません。私たちの救いは確定しています。キリストが十字架の死から復活を遂げられ天国に上げられたように、神を信じる者は、肉体の死を遂げても復活の体が与えられ、天国における永遠の喜びと祝福に満ちた生命が与えられます。

「互いに愛し合う」　ヨハネの手紙一　四章七～一二節　二〇一三年四月一四日

Ⅰ　愛の根源としての神

子どもを虐待する親は、その多くが、自分自身が親から虐待を受けて育ってきたと言われています。スポーツなどにおける体罰にしても同様です。負の連鎖です。愛を知らなければ、人を愛することはできません。

しかし神は愛に満ちておられます。神はお一人ですが、御父・御子・御霊の三位における豊かな愛に満ちた交わりを持っておられます。ここに根源的な愛があります。そして神の持っておられる愛が私たち人間に示されました。それが救いです。御父は、私たち人間を救うために、愛する御子を人として遣わしくださいました。御子は罪がないにもかかわらず罪人として裁かれ、十字架の上で死を遂げ、墓に葬られ、陰府に降られました。私たちは、御子の十字架に出会うことにより、初めて、死から命へ移され、永遠の生命に生きる者とされます。これが神の愛です。この愛が、今私たちに示されています。

Ⅱ　神の愛、愛に出会うことによる神礼拝

神が私たちに示してくださった愛（アガペー）は、見返りを求めない無償の愛です。神の愛が示された者は、まず神を愛する者となります。それが人を神礼拝へと招きます。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マタイ二二章三七節）。礼拝出席が叫ばれます。しかし、キリストの十字架による神の愛を受け入れていなければ、「礼拝厳守」が語られても律法主義にしかなりません。だからこそ救われた喜びをもって礼拝に出席することが私たちに求められています。

Ⅲ　隣人愛

その上で主は、「互いに愛し合いましょう」と語ります。

「隣人」とは誰か？　サマリア人への譬えでその答えが示されています（ルカ一〇章二五～三七節）。主イエスはまったく知らない異邦人であっても、半殺しに遭い、困っているならば、隣人として助けるべきであることをお示しくださいました。隣人を愛するのに、隣人をより分けることを、主はお望みになりません。

また愛には損得勘定はありません。主イエスは金持ちの青年に対して語られたとおりです（マタイ一九章一六～三〇節）。キリストの十字架同様、愛は無償であり、見返りを求めません。己の欲望を満たすためではなく、愛に生きることができるのは、神の愛が私たちを包み込み、神の愛が私たちの内で全うされなければなりません。

Ⅳ　愛を理解しない教会、私たちに求められていること

主は、キリスト者が愛に生きること、互いに愛し合うことを求めておられます。しかし現実には、キリスト教会の名の下、多くの戦争が行われてきました。古くは中世の十字軍があり、湾岸戦争、アフガニスタン等は目新しいものです。一九九四年にルワンダで発生した大虐殺では約一〇〇日の間に一一七万人が殺されました。部族紛争で、フツ族がツチ族を全滅させようとしました。彼らの八〇％はクリスチャンです。彼らは自分が殺されるのを恐れ、昨日まで共に暮らしていた者を殺していきました。

戦争や殺し合いは、真実の神の愛を知らず、神が求めている互いに愛し合うことができていないから発生します。だからこそ私たちは、キリストの十字架により罪が赦されながらも、なお罪の中を生きるキリスト者の罪、弱さを顧み、悔い改めなければなりません。

たとえキリスト者であろうと、教会であろうと、自らを誇ろうとする時、力を堅持しようとする時、武器を持ち、戦争を起こします。ルワンダでは、この後、教会が悔い改めを説き、フツとツチの間でも和解を勧めました。教会はキリストの十字架によって罪が赦された者同士が、互いに救いの喜びに行き、聖徒の交わりを回復したのです。私たちが持つべき武器は、人殺しの武器ではなく信仰の武具です（エフェソ六章一四～一八節）。

ウェストミンスター信仰告白（第二三章　国家的為政者について）においても、合法的な戦争を認めています。第二節「キリスト者が為政者の職務に召されるとき、それを受け入れて遂行することは、合法的である。職務の執行に当たって、彼らは、それぞれの国の健全な法律にのっとり、特に信心と正義、平和の維持に努めるべきである。それで、その目的のために為政者は、正当で必要な場合には、新約の下にある今でも、合法的に戦争を行うことができる」。合法的戦争は、信仰の故に迫害を受けている場合に限ります。先程のルワンダでも言えるでしょうが、ドイツのヒトラー政権下のユダヤ人虐殺、韓国における日本による占領時など、虐げられている場合、抵抗権として武器を取ることもあり得ます。ウェストミンスターが規定している合法的戦争は、キリスト者である為政者がその判断をすることが許されているのであって、日本においてはそれを判断できる為政者はいません。

主なる神は、私たち人間が知らなかった根源的な愛をお示しくださいました。そして主イエスは、敵を愛するように求めておられ（マタイ五章四四節）、平和を実現する人々は幸いであるとお語りくださいました（同五章九節）。私たちには、この神の愛が示されています。愛を実践することの乏しさを痛感します。愛し合い、この国にあっても愛を追い求め、平和を実現する憲法九条を守りつづけなければなりません。

「神の完全な愛」　ヨハネの手紙一　四章一三～二一節　二〇一三年四月二一日

序　周囲に合わせる生活

私たちは、人目を気にしてしまい、周囲の人たちに合わせてしまいます。日本人の多くがこうした生き方をします。事なかれ主義です。生きる規準が世間にあって、自己が確立されていないためです。日本では主体性を持たずに生きることが求められています。

Ⅰ　キリスト者としての生き方

しかし私たちがクリスチャンとして生きる時、生き方はまったく異なったものとなります。今年の目標を確認しましょう。「いつでも霊的に判断し、霊的に語り、霊的に行動しよう」。ヨハネの言葉で語れば、「わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまって」いてくださいます（一三節）。神が私たちの中心にいてくださいます。神の御言葉に真理があり、真の喜びがあります。私たちがクリスチャンとして生きようとする時、基準は神にあります。神が絶対的な基準です。

なぜなら、御父・御子・御霊なる三位一体なる神は、位格間に豊かな交わりがあり、愛があります。この愛に満ちた主が、天地万物を創造し、今も世界を御支配になられています。私たちが生きているのは、三位一体なる神が存在され、私たちに愛をもって命をお与えくださったからです。ですから私たちが生きる時、すべての基準は主なる神にあります。

そして神の内の愛が被造物である私たちにも示されています。主が私たちを救い、私たちに生きる道としての律法をお示しになる時にも、神の愛が込められています。律法と言えば「～ねばならない」と命令されているように思います。しかし私たちは、神が私たちを救いの中に入れてくださっている愛の内に、律法を理解しなければなりません（参照・マタイ二二章三七～四〇節・十戒の要約）。律法を守るから救いがあるのではありません。神はすでに私たちに愛によって救いをお与えくださっています。それがキリストの十字架です。ここに神の愛が示されています。この神による救いを受け入れ、神の子どもとして生きる時、私たちは罪の道から離れることができ、その規範が十戒です。

「神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます」（一六節）。つまり私たちが神を信じるのは、神の愛が私たちの内にあるからです。神が十戒によって、私たちを罪の誘惑から守ってくださっています。

神の愛は誰に向けられていますか？　神の民であるキリスト者のみならず、すべての被造物に向けられています。それが十戒の第二の板（第五戒～第十戒）に表れています。つまり神の愛に包まれることは、あなたも家族も日本人も全世界の人たちが含まれています。だからこそ神の愛に包まれている者は、隣人を愛します。意見を異にして、敵対する人に対しても、愛をもって祈ることができます（マタイ五章四三～四八節）。損得は二の次、三の次となります。

Ⅱ　廃れるものと、いつまでも残る神の愛

もちろん私たちは弱い者であり、意見が異なる者がいれば、感情的になり、対立してしまうことがあります。敵対している者がいれば、攻撃的になってしまうことがあります。権力によって威嚇する者、武器をもって虐げる者がいれば、恐怖を感じます。しかしこれら敵対する感情、支配欲、武力、それらは罪に由来します。権力、財力、地位、武力を持っている者が、勝利者として生きることができ、豊かな生活ができると、多くの人たちが思っています。しかしこれらはサタンの誘惑です。すべてを支配しておられ、勝利を遂げ、そして神の国の完成と共に、すべてを祝福してくださる神の御前に立つ時、地上での贅沢な暮らし、権力、それらはいずれ廃れることを理解することができます。

わたしたちは神の愛に包まれています。神は無限であり、愛も永遠です。そして神の愛により神の救いに入れられた私たちもまた、永遠の生命が与えられています。そうであるならば、神の御国が完成する時、最後の審判による恐怖に置かれることはありません。なぜならば、サタンはキリストの十字架によって滅ぼされたからです。そしてキリストは復活を遂げることにより、勝利を遂げられました。私たちは、神の愛に包まれ、救いに入れられたキリスト者です。そして、神の愛に包まれた神の御国における永遠の生命が約束さ

れています。だからこそ私たちには、世の支配、権力を恐れる必要はありません。

Ⅲ　神の愛によって生きるキリスト者

迫害の故に殉教していった人々がいます。一二使徒やパウロ、そしてキリシタンたち、韓国の朱基徹牧師、孫良源牧師、ボン・フェッファー……。ダニエルたちも信仰の闘いをしました。信仰の戦いができず、妥協し、偶像崇拝や権力に折れていった多くのキリスト者がいる中、彼らがどうして死にいたるまで、信仰を貫くことができたのでしょうか？

その答えが一八節に記されています。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出す。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされないからです」。キリストですら恐れがあり、父なる神に「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」（ルカ二二章四二節）と祈られました。なおさら普通の人に恐怖がないわけはありません。しかし、彼らは信仰によって、神の愛に包まれていました。肉の死を遂げても、神と共にあり、復活し、天国における永遠の祝福に満たされることの真実を受け入れていました。

私たちはキリスト者として、神の愛に生きることが求められています。世に合わせる必要はありません。神の真理に従って歩めばよいのです。神の愛に生きる時、私たちは、神の祝福に満たされます。私たちはすでに神の内にあり、救いと永遠の生命があります。そして神御自身が私たちの内に留まって、私たちを守ってくださいます。地上の権力、暴力、多数の声に心揺さぶられることなく、神の愛に満たされ、神の真理を貫くことができるように、祈りつつ、歩み続けていこうではありませんか。

「勝利をもたらす信仰」　ヨハネの手紙一　五章一～五節　　二〇一三年五月五日

序

今、憲法改正が叫ばれています。憲法は国民の権利が守られるためにありますが、今議

論されていることは、憲法により国民生活に制限するものです。私たちは今キリスト者として、主を証しして生きていく必要があります。現実に背を向け考えないこと、他人任せにすることは、私たちがキリスト者として生きていくことを困難にするものです。つまり、神を知り、神の求めておられる真理を知る私たちキリスト者は、今の時代、社会に対してものを語り、神の真理を貫いていくことが求められています。

Ⅰ　イエスはキリスト

キリスト者とは「イエスがメシアであると信じる人」です。「メシア」とは「救い主・キリスト」のことです。つまり「イエス・キリスト」という名前と思われていますが、実際は「イエス」が名であり、「キリスト」は「救い主」としての職務名です。ですから私たちが「イエス・キリスト」と語るのは「イエスは救い主である」との信仰告白です。

イエスを救い主として信じることは、目に見えないこの世を超えて働く力、神が存在し、神の支配の下に私たち人間が生きていることを信じることです。つまり人間の力は万能ではなく、神の御前には限界があることを受け入れることです。私たちは今、神の御前に立たされているのであって、主の御前に遜ることが求められています。

ですからイエスを救い主であると信じる時、イエスの処女降誕や十字架と復活の出来事も神の御業として、私たちの救いのためであると信じます。従って「イエスがキリストである」と信じることは、頭の中で知的考えることではありません。私たちは主の御前に集められ、主がお語りになる御言葉に聞かなければなりません。この時、主なる神の御霊が働き、私たちが神を信じることができるように働いてくださいます。

ヨハネは、「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です」と語り、私たちが神によって霊的に新たに生まれたと語ります（参照・主イエスとニコデモ（ヨハネ三章三～八節））。信じる者が救われ、天国に入るのは、神によって新たに生まれるからです。肉において死に行く者が、神の霊により、キリストが復活されたように、復活の体が与えられ、神の国における永遠の生命が与えられます。目に見えるものばかりを見て

いると、すべてを超え働く主なる神を受け入れることはできません。私たちは神の御前に立ち、神の言葉を聞き、遜りと謙遜をもって、主を信じることが求められています。

Ⅱ　聖徒の交わりに生きるキリスト者

私たちは、イエスをキリストと信じる時、主なる神を愛し、神を礼拝する者とされます。この時、主がお造りになった世界・隣人をも愛する者となります。愛するとは、接する・関わることであり、無関心であってはなりません。それは私たちが生きている世のすべてに関わることであり、政治・憲法も例外ではありません。憲法改正を語る多くの人たちは、自分と意見を異にする人たちのことを思いやることができません。少数者の意見を切り捨て、処罰することで人々を従わせます。ここには愛はありません。これは主が求めていることとはまったく正反対のことであり、これこそが罪です。

聖書は「神から生まれた者は、神から生まれた者を愛する」と語ります。キリスト者の愛の交わりは、キリスト者相互に留まることがありません。サマリア人への譬えが語るように（ルカ一〇章二五～三七節）、主がお造りくださったすべての隣人を愛することです。信仰や考えが異なる人も、愛によって受け入れます。意見が異なっても、互いの意見を尊重し、共存・共生する道を探ります。少数者・反対者の生きる道を閉ざそうとする者に対しても、その過ちを語り、理解し合うこと、違いを認め合うことを行っていかなければなりません。思想・信条の自由を認めることは、互いに受け入れ合い、尊重することです。これが真の民主主義であり、神の求めです。真の民主主義を実現していくために、キリスト者が積極的に語っていかなければなりません。

そして、私たちは神の真理を貫くための規範として十戒が与えられています。私たちが十戒に従う時、神の愛が実践され、真の民主主義を実現することが可能となります。私たちキリスト者は、今こそこの国にあって、御言葉を実践して歩むことが求められています。

Ⅲ　勝利に生きる者は、神の掟を守る

正直なところ、これだけ改憲を迫る人々が力を持つと恐ろしいです。しかし私たちはキ

リスト者であることを忘れてはなりません。私たちを救いに導いてくださった主は、全世界の創造者であり、今なおすべてを治める力を持っておられます。キリストは、十字架の死と復活により世に打ち勝たれました。私たちの恐れる世は滅び去ります。もちろん黙示録に記されているとおり、終末の闘いがあります。しかし私たちは肉を殺しても、魂を殺すことのできない世の人々を恐れることはありません。私たちに肉の生命を与え、新生による天国での永遠の生命をお与えくださる主を信じることが、祝福・喜びです。主イエスはすでに十字架の死から復活を遂げ、勝利を遂げてくださいました。だからこそ、イエスをキリストと告白する私たちも勝利者です。神の愛が私たちを包んでいます。勇気を持ってキリスト者として歩み続けよう。

「父・子御霊　三位一体の神」　ヨハネの手紙一　五章六～一二節

二〇一三年五月一二日

Ⅰ　キリストの十字架を三位一体論的に考える

「イエスはキリスト（救い主）である」と語ることは、私たちキリスト者の信仰告白です。そして主イエスの十字架こそが、信仰の中心です。

「この方は、水と血を通って来られた方、イエス・キリストです」（六節）。「水」とは洗礼、「血」とは十字架のことです。主イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を授かり、三年間の公生涯を歩まれました（参照・ルカ三章二一～二二節）。しかし主イエスの洗礼は、私たちの洗礼と意味が異なります。私たちが洗礼を授かる時は、目に見える教会に加入され、主イエス・キリストに接ぎ木され、再生・罪の赦し・新しい命が与えられます（参照・ウェストミンスター信仰告白二八章一節）。しかし主イエス御自身は、永遠に神から生まれられた神の御子です。洗礼者ヨハネも語るように、主イエス御自身は、水の洗いであ

る洗礼を授かる必要はありませんでした。御子が洗礼を受けられたのは、御自身が父なる神のご計画を遂行する者として、御父・御子・御霊の交わりを確認するためでした。

つまり、聖書が「主イエス・キリストが、水と血を通って来られた」と語る時、御子イエス・キリストの地上での生涯だけを考えるのではなく、御父の永遠のご計画が背後にあり、三位一体なる神の大いなる救いの御業を考えなければなりません。神は救いのご計画を遂行するために、イエスは神の御子でありながらも人としてお生まれくださいました。そして水の洗いである洗礼をとおして、神のご計画を遂行者であることを確認し、私たちの罪の贖いの御業として、キリストは血である十字架の死と復活を成し遂げられました。

Ⅱ　三位一体なる神の御業

キリストによって成し遂げられた神の救いの御業は、霊によって証しされます。つまり、父なる神の救いのご計画は、御子イエス・キリストに水である洗礼によって確認され、十字架の死によって成し遂げられました。それを「霊」、つまり聖霊が証しします。つまり御子イエス・キリストの成し遂げられた御業は、御言葉が私たちに伝えられ、私たちの救いのためであることが聖霊により示され、私たちが神の救いの中に入れられます。従って、永遠から永遠に生きる主なる神による私たちの救いのご計画は、御子によって実行され、聖霊によって私たちに有効に働きます。御父・御子・御霊なる三位一体の主なる神による大いなる救いの御業が、今に生きる私たちに有効に働いているのです。

新共同訳聖書は、「証しするのは三者で、“霊”と水と血です。この三者は一致しています」（七～八節）と訳します。しかしある写本では「天において証しをするものが三つあります。すなわち、御父と御言葉と聖霊で、この三つは一つです。また地において証しをするものが三つあります。すなわち、霊と水と血です。この三つは一致します」と記されています。これは元の文書から「三位一体を語っている」ことを分かりやすくするために加筆されたものであることが、今日では確認されています。初期の聖書写本者が、このように書き加えて理解を深めたことが理解できるかと思います。天における三位一体の神

の御業が、キリストにおける洗礼と十字架、そして約束の聖霊によって、私たちに見える形で明らかになりました。

Ⅲ　私たちにとって

私たちは、天における御父・御子・御霊の三位一体なる神を見て確認することはできません。しかし、この天における主の交わりと御業が、主イエス・キリストによって明らかにされ、私たちの救いへと結びつきます。つまり、キリストによって成し遂げられた水と血の御業は、私たちが主なる神を知り、信仰へと促されるしるしとなります。つまり、私たちが水の洗礼に与る時、私たちの罪は洗い聖められ、キリストにつながり、新しく生きる者とされます。新生です。霊にあって、霊に生きるのです。これは、三位一体なる神が、私たちの救いを計画してくださり、それが私たちに有効に働き、聖霊の働きによって私たちに示された時、私たちは神を信じ、新しく生きることができる者とされます。罪の赦しに先立ち、水の洗いとしての新生が与えられていることに、主の愛と憐れみを覚えます。

その上で、キリストの血としての十字架が、私たちに有効に働きます。「水」がプラスに働く部分であるならば、「血」は私たちの持っている罪の負債でありマイナス部分です。この部分をキリストが十字架において、私たちに代わって償ってくださいます。今、日韓や日中の関係において、日本政府は過去の歴史を顧みることなく、「未来志向で建設的に考えよう」と繰り返し語ります。しかし韓国の大統領パク・クネは、「日本は正しい歴史認識を持つべきだ」と語ります。日本が過去に韓国・朝鮮・中国に何をしてきたのかの事実を確認し、理解し合い、分かち合わなければ、周辺諸国との将来の建設的な関係も築くことはできません。国と国の関係において言えることが、神と私たちとの関係においても言えます。私たちは過去の自らの姿を顧み、罪を精算しなければ、未来における神との正しい関係も築くことはできません。しかし私たちは過去の清算を自分自身が担うことができず、御子に委ねなければなりません。それが血による十字架です。このことを私たちは、主の晩餐によって、繰り返し確認します。ですから私たちにキリストの十字架が示された

時、私たちは罪が贖われると同時に、私たちは罪の悔い改めを行い、神の御心・御意思である御言葉に聞き、御言葉を実践する者へと変えられていきます。

「御父・御子・御霊なる三位一体なる神」と言えば、多くの人は「なんだか遠い存在」、「神は本当にいるのだろうか」と思われ、神の存在すら否定します。しかし、私たちが今、神の御前に立たされ、私たちを救う神の大いなるご計画とキリストによる十字架が示された時、私たちの罪は贖われます。そして私たちは、この礼拝を通じて、神との和解にあり、神の救いの中に入れられていることを確認します。そして、私たちに与えられた洗礼により、すでに私たちが霊的に新たな命が与えられていることを覚え、キリストの十字架を想起しつつ与る主の晩餐の礼典により、私たちの過去の罪がすでに精算され、義と認められていることを確認することができるのです。

「永遠の命を得る信仰」　ヨハネの手紙一　五章一三～一五節　二〇一三年六月二日

Ⅰ　永遠の命に属する者

最近流行っている言葉に「いつやるの？」「今でしょ」という予備校講師の言葉があります。この言葉は、今の日本を象徴する言葉であると私は思います。受験を控えている人たちに対して、将来を見据えて「今」勉強をしなければならないことを語っています。しかし今の流行は、過去・現在・未来の歴史の中にある「現在」を捉えようとするのではなく、過去をまったく顧みない「今」を考える風潮にあります。私たちは、過去・現在・未来の歴史の中にあって、自らの生活・幸福・救いを考えなければなりません。つまり今だけを考え、過去を顧みず、近い将来しか見なければ、近視眼になります。

このことは同時に空間的な広がりに関しても語ることができます。現代は、インターネットの時代であり、グローバル化した社会です。国や民族・宗教による違いを確認し、互

いに分かち合い、受け入れあうことが求められます。しかし現在の日本では、自分のため、日本のためといった個人主義、排他主義が目に付きます。これもまた近視眼です。

時間的概念においても、空間的概念においても、全体を見渡すことで、私たちは主観的な考えから離れ、客観的に考えることができます。客観的に考えることで、自己中心から離れ、神における真・義・聖という定規をもって、判断することが可能になります。

ではなぜ人は、時間的・空間的に近視眼になるのでしょうか？　その方が楽だからです。時代の変化と将来への責任を考えず、相手の思い・意見を異にする人々との違いを確認し、溝を埋めることをしません。考えの異なる相手の思いを顧みることなく、蔑み、敵対的になることにより、自己正当化、自己中心に考えるようになります。

しかし神は、キリスト者に永遠の命をお与えくださいました。このことにより私たちは近視眼から離れ、全体を見渡すことができます。神の御支配は、永遠から永遠に至り、神を信じる者は、救いと永遠の生命の約束されています。永遠の生命が与えられることは、現在の諸問題は、今、対応することが求められ、同時に永遠にわたりその責任が問われるということです。無責任な行動をとることはできません。つまり、永遠から永遠に生きておられる神を信じ、永遠の生命に入れられることは、「今」をどのように生きるのかも問われています。

私たちは歴史の中に生きています。歴史を学ぶとは、過去を顧み、事実・問題・解決方法を確認する作業です。今「侵略戦争」を認めることが「自虐的である」と非難されます。しかし、民族の罪と真剣に向き合わなければ、同じ過ちは繰り返されます。このことが今社会の中で問題となっています。聖書において、旧約聖書におけるイスラエルの歴史を顧みることは、自らにある罪と対置して考えよと、神は私たちに求めておられます。つまり永遠の命が与えられていることを、主が私たちに宣言してくださることは、私たちが主の救済の歴史の中に置かれ、私たちも歴史的に生きることが求められているということです。

時間的に無限の神の時間に生きる私たちは、空間的にも神の創造に携わる世界の中に生

きています。そして世界中に隣人がいます。つまり永遠の命に生きることは、神が私たちを救ってくださったように、隣人にも命を与え恵みをお与えくださっていることを受け入れることです。隣人の痛みを理解し、思いやりつつ生きることです。この時、想像力が求められます。人の心の叫び、心の痛みを理解することは簡単ではありません。しかし隣人を愛することは、相手の立場に立って考えることです。敵対することではなく、理解して分かち合って生きることは、時間がかかり、簡単なことではありません。この時の規準は、神の御言葉である聖書です。だからこそ私たちは、人と語り合い、互いに理解し合おうと思う時、聖書によって自分の思いを変えなければなりません。ここに御言葉によって改革される教会を立てようとしている改革派教会の姿が明らかになります。時間的にも、空間的にも、全体を見渡す時、自分を絶対視することなく、神の御言葉により自らを省みることができます。主の御前に立つ時、自らの姿、つまり罪も明らかになるからです。

Ⅱ　永遠の命に生きるからこそ祈ることができる

「何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既にかなえられていることも分かります」（一四～一五節）。私たちが神を信じて生きる時、神の救いの歴史に組み入れられています。だからこそ私たちは神によって救われ、神の国である天国に入れられるのです。

私たちに永遠の命が与えられることは確定しています。そうであるならば、私たちを天国に導いてくださる主なる神の絶対的な力がここに働いていることを受け入れることもできます。主なる神が、私たちに働きかけてくださいます。すると、私たちが神を信じて、祈るならば、神は私たちの祈りをすべて聞いてくださいます。そして、神は、私たちの祈りを解決してくださいます。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる…」（マタイ七章七～一二節）。神の救いの御業は、永遠の命にいたる全歴史の中に位置付けられている壮大なご計画です。つまり私たちの祈りが、私たちにとってどれだけ深刻な事柄であっても、神にとっては小さなことです。そしてそれを解決してくださいます。半信半疑、疑って祈るため、私たちの祈りに力がないのです。

私たちはこの後、主の晩餐に与ります。私たちはわずかな人数です。しかし天国における晩餐はどうでしょうか？アダムから始まるすべての時代に生きた人々、全世界の人々が一同に集まり、主の晩餐に与ります。この壮大な主の晩餐に招かれていることを思えば、私たちは小さな存在です。しかし主なる神は、あなたこそ尊い存在であるとして宣言し、主の晩餐に招き入れてくださっています。だからこそ日々の苦しみ・悩みの中にあっても、主に祈り求め、主による答えをもって、日々歩み続けていくことができるのです。

「キリスト者としての生活と祈り」　ヨハネの手紙一　五章一六～一七節

二〇一三年六月九日

序

私たちはキリスト者として、自分中心に考えるのではなく、神は何を求めておられるのかを、何が真実であり、何が求められているのかを、客観的に考えて、判断・行動・発言することが求められています。

Ⅰ　後先を考えずに生きる人々

客観的に物事を考えることにより、自らの姿・罪が顕わになります。一つの行動・発言が、正しく、他人を傷つけたり、迷惑になることはないのか、神と人々が喜ぶことなのか、確認しなければなりません。そのため言動の一つひとつが慎重でなければなりません。

しかし現実には、そうした言動をすることは難しいです。また多くの人々はそうしたことをまったく考えずに生活しています。ここにはいくつかの理由があります。一つは、後先を考えず、直感的・感覚的に行動・発言するからです。自分の言動により、周囲の人々

がどのように判断し、思うのかを想像することが出来ないからです。

二つ目は、自らの言動に責任を持たないからです。誰でも、一つひとつの言動には、常に責任が伴います。特に、社会的な地位にある人の言動は、常に責任が伴います。現在は、言葉が軽くなり、人は自らの言動に責任を持たなくなりました。行いっぱなし、語りっぱなし、謝ることなく言い逃れをします。そして、他人に責任転嫁を行います。こうした言動が繰り返されることは、社会における秩序がないことを物語っています。

もう一つ、彼らは裁きに対する恐れを知りません。これは目に見えないもの、つまり主なる神への畏れです。自らの言動が表沙汰にされ、そのことの裁きがなされることに対する恐れを知りません。主なる神は私たちのすべてをご存じです。私たちは何一つ隠し事をすることができません。主なる神は、私たちのすべての言動を知っておられ、その一つひとつに対して、神の義、神の律法に照らされ判断されます。神の義に反することは、嘘をつくこと一つをとっても罪に値します。そして罪の刑罰は死です。

しかし人々は、主なる神を離れ、そして神の裁きである死を恐れません。今の自分が大切であり、自分を大切に生きています。これは不幸な現実です。私たちが「生きる」とは、創り主である神との交わりに生きる時、私たちは本当の意味で、人間として生きることができるのです。そして神と共に生きることは、永遠の生命が約束委されています。つまり、人間は生まれてきた以上、必ず死ぬことは事実ではなく、神の刑罰の結果であり、罪がなければ死ぬことはありません。

Ⅱ　罪の刑罰にある人類、神による救いにある私たち

最初に主なる神が、アダムとエバをおつくりになられた時に、「罪の刑罰は死である」として、命の契約を結んでくださいました（創世記二章一六～一七節）。神が人を作られた時、人は生きる者として創られましたが、アダムとエバは、善悪の知識の木の実を食べ、罪を犯したのです。それ以来、神の御前に露わにされる罪はすべて死の刑罰が求められ、私たちも誰一人、そこから逃れることはできません（参照・ローマ六章二三節）。

すべての人が罪により死に行く世に、主イエス・キリストが来られました。キリストが十字架に架かって死を遂げてくださり、死から三日目の朝に復活してくださったのは、罪の故に死に行く私たちの罪の刑罰を支払い、助け、救うためでした。私たちは主イエス・キリストを救い主として信じるが故に、主は私たちに救いを与えくださいました。神は私たちを死ぬ者ではなく生きる者としてくださいました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒一六章三一節）と語られるとおりです。「永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った」（使徒一三章四八節）とも語られています。だからこそ私たちは、神の愛、神の救いの中に入れられていることに感謝と喜びをもって生きるのであり、罪赦された者として、罪の道を歩むのではなく、義の道、つまり神の御言葉、神の律法に聞き従うのです。

Ⅲ　祈りの力

その上で、まだ神の民とされていない人たちのために祈ります。今は、神や教会に対して背を向けている人であっても、私たちが主に祈り求める時、彼らが主の御前に立ち帰ることが許されます。私たちは祈りの力を信じなければなりません。私たちが信じている主なる神が、全知全能な神であることを私たちは受け入れることが求められます。疑ってはなりません。半信半疑ではなりません。

では「死に至る罪」とは何でしょうか？　主イエスは「人の子の悪口を言う者は赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は赦されない」（ルカ一二章一〇節）とお語りになります。これは、聖霊のわざを悪魔のわざとする愚鈍さ、霊的盲目さ、自己満足のこと、光より闇を愛する状態にあることを語っていると言われています。主なる神が、聖霊をとおして呼びかけてくださっているにも関わらず、主の呼びかけを頑なに拒み続ける時、主の裁きに遭うのであり、主の裁きは死です。神の呼び掛けに対して、故意に逆らい、神を信じようとしない者は、神の裁きを避けることができません。彼らこそが、死に至る罪を犯しています。

しかし「死に至らない罪」を犯している者と「罪に至る罪」を犯している者を、私たちが自分の思いで、判断することは許されていません。なぜならば、誰が救われ、誰が結果的に遺棄されるかは、私たちには示されておらず、神のご計画、神の御業だからです。そのため、私たちが自分勝手に、「あの人が救われるわけがない。滅びれば良い」と宣告することは、主に対する大きな挑戦であり傲慢です。罪深い人、人々から嫌われているような人であっても、主が御手を伸ばし救ってくださるならば、彼らは罪を悔い改め、救いの中に入れられます。聖書はそうした人たちを多く記しています。マタイやザアカイの徴税人、主イエスと共に十字架に架かった一人の極悪人もそうです。パウロもまた、教会に押し入り、キリスト者を迫害していました。ですから、ヨハネは「死に値する罪があります。これについては、神に願うようにとは言いません」と語りますが、私たちは、誰であっても罪を悔い改め、救われるように祈り求めなければなりません。罪を重ねて犯す人だから、嫌な人だからということで、祈らないわけにはいきません。

私たちがキリスト者として生活することこそ、主の証しであり、証しと祈りの生活が、私たちキリスト者に求められています。

「真実な神を信じよ」　ヨハネの手紙一　五章一八～二二節　二〇一三年七月七日

Ⅰ　生きることはキリスト

ヨハネは手紙の最初で「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」と語り手紙を語り始めました。ヨハネが「ある」、「聞く」、「見る」、「触れる」五感に訴えることは大切なことです。当時の異端グノーシスは「知識」が大切であり、霊的なものを重視し、肉的なものを罪と定める聖悪二元論の考えでした。ですからグノーシスを信じる人々は、知的

な事柄を霊的に追い求め、肉的な生活に信仰的に目を向けることがありませんでした。ヨハネが手紙の終わりに「わたしは知っている」と語るのも、このことを意識しています。信仰は頭で理解することに留まってはならず、体全体での理解、生活に生きるものでなければなりません。

主なる神は、歴史・出来事をとおして私たちにお語りくださいます。私たちは、一つひとつの出来事に主がお示しくださった意味があり、主の御前に私たちが生きていることを理解しなければなりません（Ⅰコリント一〇章三一節）。それは苦しいこと、つらい出来事に対しても主の意志を確認しなければなりません。

Ⅱ　私たちは知っている！

私たちが何を知っているのか？　第一は、すべて神から生まれた者は罪を犯さないことです。これはクリスチャンになれば一切罪を犯さないという完全聖化を語っているのではありません。「神からお生まれになった方が、その人を守ってくださり、悪い者は手を触れることができない」のです。私たちは罪赦された罪人であり、なおも罪を犯してしまいます。しかし救い主イエス・キリストの十字架によって、私たちの罪は贖われました。その上で、私たちが罪に落ちぶれ神から離れないように、キリストは、私たちを守ってくださいます（参照・Ⅰコリント一〇章一三節）。言い換えれば私たちは律法主義から解放されています。「～ねばならない」からの解放は、私たちの信仰生活を非常に楽なものとします。必死さから解放され、信仰に生きる喜びが与えられます。つまり救いとは、霊的なわけの分からないものをつかみに行くのではなく、罪の刑罰によって滅びることはない、という具体的な喜びに満ちた人生へと変えられていくことです。

第二に「わたしたちは神に属する者」です。この世にあっては、神に属するか、悪い者・サタンの支配下にあるかのどちらかしかありません。そして私たちは神の属しています。属しているのか、属していないのか分からない、まだ決まっていないのではありません。信仰を告白し、教会の礼拝に出席するのは、すでに主の招きにあり、神から生まれ、神に

属する者とされているからです。私たちは神の恵みの下に生きています。しかし、この世全体が悪い者の支配下にあります。神を信じて生きるとは、私たちの主人、創り主、救い主である主なる神の御前に生きること、主を礼拝し、主を誉め称え、主のお語りになる御言葉に従った歩みを行うことです。そうであるならば、必然的に、神を信じていない人たちと目標が異なってきます。神の栄光のため、義を貫くものとして、善き行いにおいて主を証しする民として生きるのです。

主は、今、私たちに、日本に生きるキリスト者に、様々な形で試練をお与えになられています。震災、憲法改正、そしてキリスト者の減少……。私たちは、神に属する者として、キリスト者として相応しい生活を送っているのか、このことが今、主は私たちに問いかけています。神を知らない人たちの内に同化して生きていくことは求められていません。地の塩、世の光として、神の栄光が光り輝く生活、それが善き業であり、敬虔な人生を送ることです。これ抜きに伝道しても、それは伝道になりません。伝道はノルマ主義の営業ではありません。神を知らない人たちとの違いが明らかにあり、光り輝くからこそ、福音を携える時、人々に伝わるのです。

私たちが知っていなければならない三つめのことは、真実な方、私たちを救いにお導きくださった主なる神、私たちの救いを御自身の十字架によって成し遂げてくださった主イエス・キリスト、そして今もなお、私たちを守り、私たちに神の霊によって守り導いておられる聖霊の三位一体なる神が、私たちと共におられることです（インマヌエル）。神は真実な方です。嘘、偽りがありません。そのため、私たちが神から生まれたこと、私たちが神に属すること、神の救いにあることを宣言してくださいます。

それと同時に、主は永遠の命を持っておられ、私たちに永遠の生命をお与えくださいます「人間の体は、死後、塵に帰り、朽ち果てる」。これで終わりと考えるのは、神を知らない人たちです。「しかし、死後の実在を持つ彼らの魂は（それは死ぬことも眠ることもない）、それをお与えになった神に直ちに変える。義人の魂はそのとき完全に清くされて、

いと高き天に受け入れられ、そこで彼らの体の完全な贖いを待ちながら、光と栄光の内に神の御顔を見る」（ウェストミンスター信仰告白三一章一節）。

信仰とは、心の問題、魂の問題ではありません。私たちの肉に関わること、私たちの生命に関わること、私たちの生き方に関わることです。生活の中の一部ではなく、生活の全てが主の御前でキリストの民として生きることが求められています。

「真理」　ヨハネの手紙二　一～三節、マラキ二章一～九節

二〇〇〇年二月一三日

ヨハネの手紙一を終え、今日からは第二の手紙に入ります。わずか一三節の手紙ですが、私たちは疎かにしてはなりません。しかし、この手紙は歴史的には疎かにされてきました。使徒ヨハネの著作であることが疑われたからです。二～三世紀の頃、新約聖書が正典として整おうとしていた頃、この手紙は正典性が疑われました。新約聖書の正典の規準は、①一世紀に書かれたこと②十二使徒あるいはその弟子たちによって書かれたこと③キリストが証しされていることです。この手紙は、その一つ著者が誰であるかとの問題があったからです。つまり「長老」とは誰かが問題とされたのです。第一の手紙の要約的に書かれていることから、後の時代の者がまとめたのだとも言われています。また、使徒ヨハネがこの手紙を書いたことを認めたとしても、なぜ自らのことを「長老」と呼んでいるのかも問題とされました。しかしこの点に関しては、教会職務としての長老ではなく、年長者で人望があった人たちのことを指しています。私も、ここでは上諏訪湖畔教会の牧師ですが、大学時代の友と再会した時などは、牧師であることは名乗る必要はありません。同じ様に、使徒ヨハネは良く知られている人に対して手紙を書く時、「自分はイエス・キリストの使徒ヨハネです」と語る必要はありませんでした。

では宛先です「選ばれた婦人」とは誰か？　ヨハネは晩年、エフェソで過ごしたことが知られています。このエフェソあるいはその周囲の教会に書かれたとするのが一般的な見解です。当時、教会はキリストの花嫁と呼ばれていました（Ⅱコリント一一章二節、エフェソ五章二二～二五節、黙示録二一章九節）。つまりこの手紙は、使徒ヨハネが、グノーシスの影響を受け、信仰から離れる恐れのある小アジアの教会に向けて語られました。内容は神の真理です。第一の手紙とまったく同じです。私は、あなた方を愛しています。そして私の周囲にいる人たちもあなた方を愛しています。それは、真理を知っており、真理にあってあなた方を愛していると語ります。

真理とは、広辞苑では「ほんとうのこと、まことの道理」と記されていますが、聖書の真理は、福音の真理です。マラキ書二章には、祭司を中心とするイスラエルの罪が指摘され、悔い改めが促されていますが、そこで語られた真理は、神と私たちとの間で結ばれた命と平和の契約です。真理の教えとしての契約が現実に現れました。御子によってです。

御子イエス・キリストが契約の中心・福音です。真理とは、イエス・キリストの贖いによる永遠の生命に与っていることです。霊的な神を意識するのではなく、人間としての遜りを遂げられたイエス・キリストが人間として十字架に架かられた事実を語ります。その結果、私たちは神と結びつき、永遠の生命が与えられました。私たちとあなた方とを繋いで愛し合うことができるのは、この真理の故です（二節）。民族・性格・気性が異なった人たちが一致し愛し合うことができるのは、この永遠にある真理の故です。

永遠の生命と契約は、父なる神と御子の故に、私たちにあると宣言します（三節）。もちろん、今御言葉を通して私たちを神の御許に結びつけるのは聖霊であり、父・子・御霊なる三位一体なる神により、真理が保証されています。グノーシスは霊的な事柄を強調するため、御子を強調して語ります。つまり、私たちの永遠の生命は、父の約束と御子の十字架の贖いと今与えられている聖霊によって約束されています。この永遠の生命の約束が、私たちに与えられている福音であり、真理です。

キリスト教会の一致を保ち、互いに愛し合うことができるのは、主なる神との霊的な交わりから可能になります。私たち一人ひとりが、礼拝を通して、主との交わり、キリストによる救いを、日々確認し、感謝を持ち続けることこそが、必要です。私たちが、この主との真理にある深い交わりにあれば、教会に一致が生まれ、そして互いに愛し合うことができます。

ヨハネは、今、異端信仰が入ってきた小アジアの教会に対して、イエス・キリストにある真理に結ばれていることを確認するために、この手紙を送っています。私たちも、一人ひとりがさらに御言葉による救いの確信を深め、互いに真理にあって愛し合っていること

を確認しなければなりません。

「互いに愛し合う」　ヨハネの手紙二　四～一一節、ゼカリヤ八章一四～一七節

二〇〇〇年二月二〇日

前回は、挨拶から、著者ヨハネも読者である私たちも主の真理にあることを確認しました。御言葉の語る真理は、イエス・キリストの贖いによる永遠の生命に与っていることです。グノーシスの影響で、知恵や霊的なものが重視され、御子イエス・キリストが軽視されていました。そのためにヨハネは、肉体を持たれた御子が救い主となってくださったことを語ります。そして宛先の教会が、真理の内に歩んでいることを喜びます（四節）。多くの者が真理から逸れてグノーシスを求めていたからです。

また、彼らはただ真理に歩んでいたのではなく、御父から受けた掟どおりに歩んでいました（四節）。掟はキリストの教えですが、それは遡れば御父にたどり着きます。つまり、十戒であり旧約聖書の律法です。主が私たちにお与えくださった救いは、旧約・新約問わず不変です。旧約・新約の違いは、御子イエス・キリストの前か後かの違いに過ぎません。律法があるからこそ、自らの罪を知ることができ、神の義を知ることができます。

ゼカリヤ書は、北イスラエル王国が滅びてアッシリアに捕囚の民に遣わされ、南ユダ王国もエルサレムや神殿が崩壊してバビロンに捕囚となり、その後、再びエルサレムに帰還したユダヤの民に対して、過去の罪に対する悔い改めと神への従順を語っていきます（ゼカリヤ八章一四～一七節）。主によって与えられた掟により、自らの姿を見、悔い改め、そして主に従うことへの招きです。

だからこそ、ヨハネは五節を語ります（参照・第一の手紙二章七～八節、三章一一、二三、四章二一節）。律法を厳格に守ることと、互いに愛し合うことが、イコールで結ばれ

ています。これは律法主義ではないことを意味します。私自身弱い者であり、人に配慮することが苦手です。しかし神は忍耐をもってそれを耐えてくださり、さらに、平和をもたらしてくださろうとしています。何もできない人間がここにいます。しかしそれを赦してくださった神の愛を知る時、私も互いに許し合い、さらに私自身を赦してくださった方の義に従うよう促されます。

そして、神の愛が私たちに真理として与えられたのが、御子イエス・キリストの人間としての遜りの歩みと十字架の御業です。三位一体なる神は義なる神であり、掟を定めておられ、さらに義をまっとうされるお方です。同時に、栄光に満ちておられます。しかし主は、それ以上に私たち罪人を愛してくださっています。人間を罪から救い出すために、御子をこの世にお送りくださり、私たちに代わり掟を全うしてくださり、罪の償いをなしてくださいました。ここで、愛と戒めがつながります。だからこそ、ヨハネは、グノーシスではいけないと語ります。イエス・キリストの人間性を否定すること、イエス・キリストの神性を否定することは、神の真理を否定します。

つまり、掟も愛も、神が私たちにお与えくださったものです。そして掟と愛との密接なつながりを、イエス御自身が、マタイ福音書二二章三四～四〇節で語っておられます。律法（十戒）の要約であると語られていますが、ここには愛が伴います。

「卵が先か、鶏が先か」と言う議論がありますが、掟を守ること・愛することはどちらかがあれば、他方もできるというものではなく、すべてが神がお与えくださった恵みであることを理解した時、互いに罪をゆるしあい、愛し合いつつ、なおも掟に従って歩もうとする心が生じてきます。

「キリストの教え」　ヨハネの手紙二　四～一一節、列王記上一三章一一～二四節

二〇〇〇年二月二七日

ヨハネは、手紙を書き送っている教会（おそらくはエフェソかその周辺）の信徒が、真理に歩んでいることを大変うれしく思っていました（四節）。それは、当時グノーシスと呼ばれる異端がはびこっていたからです。彼らはイエス・キリストが肉となって来られたことを公に言い表そうとしない（七節）、反キリスト・異端者です。

悪霊は、神に敵対し、私たちを罪の中に陥れようとする霊ですが、教会の中でも、クリスチャンの信仰を奪おうとします。グノーシスは、私たちの生きている世界（肉）をすべて「悪」として、人間が救われるには「霊」的な世界を求め、「そのためにグノーシス（知恵）を求めなければならない」と語ります。そのため、救い主が肉的に存在はしないとします。こういった異端は、その最中におかれた人には、非常に恐ろしい存在であり、注意が必要です（八節）。その例が列王記上に記されています。一三章全体を見る必要がありますが、ここで神の人と呼ばれる預言者は、ヤブムアム王の前に行った時、神のご命令に従い、王の誘いにはのりませんでした（一三章六～一〇節）。ところが、この神の人は、老預言者と呼ばれているいわゆる偽預言者が語る言葉に対しては、聞き従い、騙されてしまいます（一三章一五～一九節）。つまり、反キリスト・異端者たちは、あたかも同じ信仰を持っている様に語りつつ、巧みに騙して、私たちの信仰を捨てさせようとします。

現代では、統一協会やエホバの証人・モルモン教が異端です。しかしそれ以上に恐ろしいのは、現代神学です。いかにも新しい進歩的ですようなネーミングですが、私たちは注意しなければなりません。現代神学を信仰する人たちは、恐らくプロテスタント教会の中にもいます。彼らの聖書の読み方は、現代の科学技術の発達によって解明された科学が絶対的なものとし、そこから外れる奇跡・キリストの処女降誕や復活・いやしなどは否定します。そして、「この二〇世紀の科学の発達した時代に奇跡など信じるのか？」と語りつつ、教会の人々を惑わします。

そもそも自然界の秩序は、自然があるからこそ存在します。そこに科学は入り込んでいます。私たちは創造主と被造物の関係を覚えておかなければなりません。創世記一章において、天地万物（すべての自然）を創造されたのは主なる神です。従って自然界に存在する秩序も、すべて神が創造してくださいました。だからこそ、この自然の秩序を超えた奇跡も、人間の癒しも、創造主なる神だからこそ可能となります。それを否定すれば、天地万物の創造も否定し、神の存在を自然界の下に置くことになります。

この様な反キリストは、キリスト教会の歴史を通して現れています。そして、それぞれの時代の教会は、反キリストとの激しい戦いの中、信仰を守り、教会を守り、現在に至っています。私たちの教会では教理を重視しますが、この教理自体がキリスト教会の反キリストとの戦いの証拠であり、御言葉によって神の真理を証ししてきた結晶です。

例えば、旧新約聖書六六巻は、それを否定する人たちがいたからこそ、その様に定義する必要が出てきたのです。例えば、四福音書を一つにしたり、今学んでおりますヨハネの手紙二・三などをリストから外したり、黙示録を外したりします。二性一人格・三位一体といった教理もしかりです。

キリストの教えにとどまっている人は、御父も御子も信じます（八節）。私たちが今、教理を持ち得たのは、キリストの教えがあるからです。私たち自身の知識や記憶だけで、信仰を守ることなどできません。教理を持っていても、それを誤って解釈し、神の御前で罪を犯してしまう存在です。それだけ人間は弱いのです。反キリストは、私たちのそういった思い上がった隙を狙い、キリストから離れさせ、信仰を取り除こうと狙ってきます。だからこそ、ヨハネは強い調子で注意を促します。「この教えを携えずにあなたがたのところに来る者は、家に入れてはなりません。挨拶してもなりません。そのような者に挨拶する人は、その悪い行いに加わるのです。」（一〇～一一節）。

「親しく話し合う」　ヨハネの手紙二　一二～一三節、民数記一二章二～一六節

二〇〇〇年三月五日

説教者は、主の日の朝の説教をするために、備えて準備をします。私も御言葉に聞き、神からの豊かな恵みと祝福に満たされつつ準備をしています。しかし同時に、御言葉から誰よりも先に自らの罪、愚かさ、弱さが示されます。今日与えられました御言葉も、私自身、ただ主の御前に悔い改めが示されました。

ヨハネの手紙二は、わずか一三節の手紙であり、短い手紙です。読者に語りたいことはまだ沢山あるかと思います。そのことはヨハネ福音書二一章二五節や二〇章三〇節でも語られています。主イエスについて、また主イエスを信じる信仰について書き記すならば、きりがありません。現に、主イエスが来臨されて以来二〇〇〇年の年月が経ちますが、御言葉が語り尽くされることはなく、礼拝において、御言葉が説き明かされ続けています。

しかしヨハネは、「これだけで良い」と語ります。ヨハネは第二の手紙だけで「十分だ」と語るのではなく、福音書や第一・第三の手紙、また他の福音書やパウロ書簡や手紙なども念頭に置きつつ、書き記された御言葉はこれで十分だと語ります。この当時すでに与えられていた旧約聖書、そして整いつつあった新約聖書があれば、主イエスのこと、そして救いのことを理解することが十分できます。そのことは福音書二〇章三一節にも記されていることです。

ヨハネにとってより重要なことは、直接会い親しく話し合う（一二節）ことです。そして説教し交わりを持つことです。私たちは今、神の御言葉の説教を、私から聞いています。直接会って、御言葉を聞く必要がなければ、私のような、言葉足らずで、未熟で、能力のない者の説教など聞くに値しないでしょう。特に現代では、様々な素晴らしい説教者（加藤常昭先生・榊原康夫先生など）の説教集が出版されています。ラジオでも説教が流され、インターネット（渡辺信夫先生など）でも掲載されています。それらのものを活用することは、確かに有用です。しかし、これらのメディアが説教に代わることはあり得ません。そ

のことをヨハネはここで語っています。

なぜか？信仰とは、キリストとの霊的な、そして人格的な交わりが必要だからです。神は、無味乾燥なお方ではなく、三位一体で、ご自身交わりを持たれておられます。ここに人格もあれば、感情も伴います。そのことを伝えるために、説教者が主によって立てられています。私自身、無味乾燥で鈍感な人間ですが、それでもなお、主は私をお立てくださり、説教者としてくださっています。不思議なことですが、ここに主の召しがあります。民数記一二章には、主によって立てられ召しを受け、働いていたモーセに、気に入らない姉ミリヤムと兄アロンが主に対して抗議をしている場面が記されています。きっかけは、モーセがイスラエル人ではなく、クシュ（エチオピア）の女性を後妻にしたことです。しかし主はモーセを召されたことを語ります（一二章六～八節）。そしてその賜物がモーセに与えられました。だからこそ、イスラエルの民の上に立っています。確かに、アブラハムにしても、モーセにしても、自己保身に走り、過ちを繰り返しています。しかし、主が彼らを召し、立ててくださいました。私たちは主の召しに従う必要があります。

しかし説教者は、神に代わる存在ではありません。罪に汚れ、弱い人間の一人です。しかし、説教者の与えられている主との交わりが、説教の中に表れ、それが空気を伝わり、語られます。こうして主との交わり、キリストとの交わりが与えられていきます。目と目を合わせて語り、後に交わりを持つこともできます。この様な交わりが必要であり、そのことにより、それぞれの立っている信仰を確認し、また覚えることができます。ここに、信仰の養われる要素があります。

いくら聖書をひたむきに読んでいても、自己解釈に終わっていては、信仰の養いはありません。だからこそ、ヨハネは「これ以上書くことは止めて、直接会って話し合いたい」と語ります。私自身が欠けており、またこの教会にとって必要なことは、もっと霊的な交わりを増やして、交流することです。そのことによって、それぞれが互いに理解し合い、信仰の養いが主によって与えられていきます。

「真理に歩む」ヨハネの手紙三　一～四節、マラキ記二章一～九節

二〇〇〇年三月一二日

今日からヨハネ第三の手紙に入ります。第一の手紙が広い地域の教会に対して語られ、第二の手紙が「婦人」と語られているエフェソ地域の教会に対して語られたのに対し、第三の手紙は「ガイオ」という個人に宛てて書かれた手紙です。そしてガイオという人物は、まったく素性が分かりません。新約聖書では「ガイオ」という名が五回出てきます。①使徒一九章二九節。②使徒二〇章四節。③ローマ一六章二三節、④Ⅰコリント一章一四節。⑤ヨハネの手紙三。このガイオと言う名は、多くの者が持つ名であり、私たちは手紙の宛名であるガイオを特定することは不可能です。テキストより、旅人を丁重に持てなした兄弟であったことだけを知ることができます。

では何故、名も知れないガイオに対して個人的に宛てられた手紙が新約聖書の中に残されることとなったのでしょうか？　それは、この手紙が使徒ヨハネによって記されたということと同時に、当時の教会においても福音として受け入れられていたからです。その根拠が一節にも示されています。「わたしは、あなたを真に愛しています」。真理にあって愛するとは、すなわち福音の真理を共に信じ、共に持ち、共に救い主イエス・キリストに接ぎ木され、キリストにある永遠の生命の交わりに堅く結ばれている者の間に生じてくる、兄弟姉妹としての愛です。第一・第二の手紙でも強調されていた福音の真理と切り離せないキリスト者相互の愛に結ばれています。その思いがヨハネにあり、ただガイオに対して語られた手紙として読むのではなく、同じ信仰を共有するキリスト者に語られている手紙であるとすることができます。

二節では、健康であるように祈っています。ガイオが健康ではなかったのではなく、一

般的な挨拶です。しかし、これは体の健康だけではなく、魂が恵まれるようにも祈っています。相撲では心技体と語られますが、人間の体は、肉体と魂(心)を同時に考える必要があります。「現代人は病んでいる」と言われますが、これはまさに肉体的な病みではなく、魂の病みです。日本では、最近でこそカウンセリング・不登校・保健室登校が叫ばれるようになりましたが、今まで魂の問題について考えられてきませんでした。日の丸・君が代の押しつけは、賛否はともかくとして、心を強制することであり、心の問題を意に介さない一つの表れです。これが日本の病みの原因の一つでもあると言えます。

「心の病み」の問題を考えるのは、専門的な知識が必要であり、専門家に議論を委ねる必要があります。しかし同時に聖書には、根本的な問題の解決が秘められています(一～二節)。「ヨハネは、あなたを真実にあって愛しています」と語ります。ただヨハネが個人的にあなたを愛しているのではなく、その前提は、共にキリスト者であることです。神があなたを愛していてくださっています。あなたの生命は、神にとって何よりも尊いのです。何もできない無価値な者ではありません。神の国にとって不可欠な存在です。だからこそ、独り子イエス・キリストは、あなたのために十字架にお架かりくださいました。そしてあなたは、神の子とされ神の国に招かれています。今日は、聖餐式がありませんが、あなたは主の晩餐に招待されています。晩餐は、招待客が揃わなければ始まりません。あなたは、そこに招かれています。それ程までに、神にとってあなたの生命は尊いのです。だからこそ、キリストの信仰にあるあなたの魂が恵まれていることをヨハネが喜びます。

そして、ヨハネは三～四節で言い換えます。魂の恵みに満たされて歩む生活は、それは同時に真理に歩む生活です。主がお与えくださった真理、つまりキリストの十字架の贖いにより私たちに永遠の生命が与えられたことに心から感謝しつつ、日々の生活を歩んでいきたいです。ここに、魂の恵みが満たされた生活があります。

「善を行う者」　ヨハネの手紙三　五～一二節、詩編三四編一～二三節

二〇〇〇年三月一九日

第三の手紙が第一・第二の手紙大きく違う点は、①個人ガイオ宛に書かれたこと、②最初の二つの手紙は異端（グノーシス）が教会に入ってきたことに対する警告と注意が語られていましたが、この手紙はそうではありません。この手紙はガイオ個人に語りつつ、教会における一致、キリスト者の歩むべき方向性が三名のキリスト者を通して示されています。

最初はガイオです（五～八節）。ここにガイオの信仰と当時の教会の姿が示されています。当時の教会は、ユダヤ教のシナゴーグを教会堂とした教会もありましたが、ほとんどは家の教会です。そして伝道者は、それらの家に招かれ説教を行います。彼らは、御言葉の教えの見返りに報酬を受け取ったと誤解されることを恐れ、教会員以外の人々からの報酬は一切受け取ることなく、旅先での生活はすべて家の教会に委ねます。そしてガイオは彼らの世話をしていました。伝道者たちはヨハネの所に戻った時に、ガイオの働きを賞賛して伝えます。この様な奉仕を通じて、ガイオや当時の教会の人々は、宣教の働きに寄与し、教会形成のための働きました。

次にディオトレフェスです（九～一〇節）。彼は反キリストはなく、キリスト者です。従ってヨハネは彼の排除を求めず、罪を指摘し罪が除去されることを求めます。彼の罪は権力欲です。彼は自らが教会の指導者として立とうと願っています。小さな教会が一致を持ち、成長していくためには、指導力のある人が必要です。しかし教会は、ある特定の牧師や信徒の所有物ではありません。教会は、キリストに遣える場であり、普遍的な存在です。信仰の継承がなされていくことが求められます。彼の罪は、私にもどこの教会にも潜む罪です。

第三番目はデメトリオです（一一～一二節）。彼は巡回伝道者です。

これら三名のキリスト者から教会のあるべき姿が見えてきます。ディオトレフェスについて繰り返しますが、罪の指摘であり排除ではありません。教会は、老若男女が集まる場所です。そこに様々な個性があり、ぶつかり合い、様々な確執も生まれることもあります。しかし教会は、この個性と個性が互いに人を退けあう場ではなく、互いの個性を生かす場です。互いに理解し合うことが必要です（参照・ローマ一二章三～八節）。神にとって、教会に集っているすべての人が尊い存在であり、誰一人欠けてもダメです。

ただ一つ神の真理による一致があればよいのです。つまり、キリストの十字架による私の罪の赦しを受け入れ、キリストによる救いを信じることです。神は私たちの生命を、死の中から取り上げてくださいました。これを誰も邪魔することはできません。主が生かしてくださった生命が、互いに主を証ししつつ、栄光をたたえて歩む時、ここに一致が生まれ、キリストの教会を建て上げていく方向へと向かっていきます。この時、様々な個性は、互いに排他的になることなく、共に生かされていきます。そして神の真理を持つ者は、神の律法に耳を傾け、善を行う者へと変えられていきます（一一節）。

改革派教会が長老主義を採用し、牧師・長老・執事を置くのは、ディオトレフェスの様に、一人の人間の罪により、教会が倒さないようにするためです。地上の教会には、どうしてもこの様な罪が入ってきます。教会を霊的統治してくださっているのは、主なる神ですが、それを管理するのは罪人である私たち人間です。サタンも教会を狙っています。悪を避け、善を行うことができるのは、様々な個性のぶつかり合う教会の中にあって、罪が混入しても、他の人の目によって、チェックすることにより、悪を避けることができるからです（参照・詩編三四編一二～一五節）。悪を遠ざけ、善を行う教会にキリストの私たちに対する愛が溢れ、神の真理があります。

「書き記された神の言葉」

ヨハネの手紙三　一三～一五節、ヨシュア一章五～一八節

二〇〇〇年三月二六日

信仰の継承について考えます。私にとって今日は信仰の継承を考える特別な区切りの日です。私の恩師神港教会の安田先生が今日をもって引退されるからです。モーセの死後、イスラエルを率いたヨシュアの気持ちです。ここには後ろ盾を失った不安な思いもあります。しかし主はヨシュアに「見捨てることはない。強く、雄々しくあれ」（一章五～六節）と語ります。群を自分の力で担うのであれば、大きな負担ですが、神がすべてを背負ってくださるのであり、励まされる御言葉です。いつの時代も、主が共にいてくださるからこそ信仰の継承が可能となります。

ヨハネから手紙を受け取ったガイオも、教会で問題を抱えていました。恐らく彼は教会の長老か執事の様な教会の指導者であったと思われます。教会にはディオトレフェス（九～一〇節）がいました。教会は、牧師や長老一人の力によって支配されておれば、それはキリストの教会ではなく、教会の名を借りた人間が権力を振る舞う場所となります。従って、短い言葉ですがヨハネの手紙はガイオにとって励ましとなりました。

ヨハネはまだ語ることがあったでしょう。しかし、ヨハネはここでペンを置こうとします（一三節）。紙（パピルス）が貴重品であったこともあります。しかしここには二つの理由が考えられます。第一に直接会いたいと願っているからです（一四節）。第二に、福音書・他の手紙・旧約聖書のすべてによって、ヨハネの語りたいことがすべて語られているからです（ヨハネ福音書二〇章三〇～三一節）。

私たちの信仰が養われ、キリスト者として立ち、かつ教会を建て上げるために、必要なことのすべてが記されている御言葉が与えられており、かつ教会におけるキリスト者相互の深い人格的な交わりが与えられています。御言葉とキリスト者相互の交わりがあれば、教会は信仰が継承されていきます。どちらかが欠けてもキリストの教会とはなりません。このことをヨハネはガイオに語りたかったのであり、また私たちに語っている言葉です。

そして最後の一五節の言葉につながります。「あなたに平和（平安）があるように」とは、キリストによる罪からの救いと永遠の生命が与えられた者として、主の真理のうちに歩み続けて欲しいことです。これは信仰が引き継がれた私たちに対しても語られている言葉です。だからこそ、「よろしく」という言葉は、ヨハネの周囲の人々がガイオに対して語っているだけではなく、旧約の預言者から使徒、信仰の先駆者たちが、後の時代の教会の信徒である私たちに語っている言葉として、受け取ることが求められています。

「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる」（ヨシュア記一章九節）。

「必要な福音」　ユダ一～四節、列王記上二一章八～一六節

二〇〇〇年四月二日

私たちは改革派教会に属していますが、他の教派もまたイエス・キリストを救い主と信じている点で、同じ信仰者です。しかし逆に、たとえ教会に入ってきた人でも、イエス・キリストを救い主として否定する人たちは、同じ信仰を共にする者ではありません。ユダの手紙は、イエス・キリストを否定する者たちがいる教会に対して、彼らの行く末はどうなるのかを語りつつ、イエス・キリストの福音の必要を伝えます。

本文に入りますが、最初に手紙の著者が示されます（一節）。ユダという名は、遡ればヤコブの子に辿り着きます。このヤコブの子ユダからダビデが、そして主イエスにまで至る神の祝福が受け継がれます。「主を誉め称えよ」（創世記二九章三五節）という意味です。その後ユダの名は一般的となります。そのため、新約聖書にもユダという名は何人も登場します。イスカリオテのユダ、ヤコブの子タダイと呼ばれたユダは有名です（ルカ六章一

二～一六節）。

手紙の著者ユダは主イエスの弟と言われています。ユダは「ヤコブの兄弟」だからです。「ヤコブ」も新約聖書では一般的でしたが、この手紙が書かれた（六八～八〇年代）当時、ヤコブの手紙の著者であった主イエスの弟ヤコブが知られていました。使徒一五章のエルサレム会議においても発言をしており（一五章一三節）、エルサレム教会の中心的な人物でした。ユダの手紙の著者は、このヤコブの弟、つまり主イエスの弟ユダです。福音書も主イエスの弟にユダがいたことを証言します（マタイ一三章五五節）。

では何故、ユダは、「イエス・キリストの兄弟」とは名乗らず、「イエス・キリストの僕」と名乗るのでしょうか？　ヤコブも同じように語ります（ヤコブ一章一節）。その理由は、自らの名を必要以上に高めて解釈されることが無いように注意した結果です。逆の結果は、現在でもマリア崇拝がローマ教会で続いていることにあります。

では宛先はどこでしょうか？　教会の状況は分からないですが、反キリストを語る者が集っている群であることは確かです（四節）。彼らはイエス・キリストの真理が語られても、受け入れない人々です。

列王記上二一章に記されるイゼベルはまさに反キリストです。当時北王国イスラエルをアハブ王が統治していましたが、宮殿近くのブドウ畑を欲しがりました（二一章二節）。しかし畑の持ち主ナボトはそれを拒みます（三節）。そのことを恨み、嘘の証言をさせてナボトを石打にして殺させ、土地を奪ったのがイゼベルであり、アハブはそれを追認しました。このイゼベルは、アハブ王と結婚してからも、バアルの信奉者で四五〇人のバアルの預言者と四〇〇人のアシェラの預言者を抱え（列王上一八章一九節）、主の預言者たちを迫害して殺したりしていました（列上一八章四節）。つまり、神の民イスラエルの王家に嫁に来たにも関わらず、主なる神を信じるどころか、偶像に仕えていました。

一方私たちは、日本文化の中育ってきています。それは偶像に囲まれた文化です。科学偏重の無神論もあります。教会にはそういう文化をまったく捨てずに来る人たちもいます。

また私たち自身も偶像的な文化が根本にあります。イゼベルであれば、その過ち・罪が直ぐに示されますが、私たち自身の罪・欠点は自分では気付かないものです（マタイ七章三節）。

だからこそ私たちは自己吟味しながら、信仰のために戦うことが求められています（三節）。信仰のみが、神と私たちを一つに結ぶ絆です。そして、教会は神の聖さを保ち続けることができます。

今から与る主の晩餐により、神と私たちが一つの絆で結ばれていることを覚えることができます。ユダは、キリストによって立てられた一人の僕として、信仰の戦いが強いられています教会に対して、励ましの手紙を送ります。誰も、自分自身の力で、信仰深くすることはできません。私たちにすでに与えられています信仰のみが真実であり、私たちの考えや情欲を押さえて、すべてを神に向けさせます。そしてこの信仰の戦いは、キリストを否定するすべての人々との戦いであると同時に、自分自身との戦いです。私たちは弱い者です。自分自身の力では、進歩はありません。御言葉と共にある聖霊の働きにより、福音が私たちに与えられ、さらに信仰の養いがあります。

「主を信じない者」　ユダ五～一六節、民数記一七章六～一五節

二〇〇〇年四月九日

ユダの手紙は、主イエス・キリストを否定する者たちがいる教会に対して書かれた励ましの手紙（四節）です。地上の教会は、主の御霊の働きにより建てられましたが、そこに集う者は救われてもなお罪人です。そこにサタンはつけ込み、教会に腐敗・罪を持ち込みます。

ユダは旧約の三つの例を紹介します。①五節は出エジプトの記事です。エジプトからの

救いに与ったイスラエルの民は、荒野の歩みにおいて、主の恵みを忘れ、モーセ達に対して不平不満を語ります。そして主の約束を忘れます。その結果、エジプトを出発した時の壮年男子はヨシュアとカレブを除き、荒野で息絶えます。②六節は天使の堕落の記事です（参照・創世記六章一～四節）。神の特別の祝福の内に創造された天使が、汚れ腐敗した状態が示されています。③七節はソドムとゴモラです（参照・創世記一九章）。これら三つに共通していることは、主の恵みが示されている者たちが罪を繰り返し、主に裁かれていることです。ソドムとゴモラも、一八章におけるアブラハムの執成しの祈りにより、充分悔い改める猶予が与えられていました。

そして八節には、ユダの書き送った教会の罪が示されます。そして彼らは自滅していきます（一〇節）。主に従う者は、自分の判断で罪を裁くことはできません。罪の裁きは、創造主であり統治主の働きであり、私たちは一被造物にすぎません。だからこそ、ユダはミカエルの例を出し、罪への裁きは、主に委ねることを求めます（九節）。

そして罪により自滅していく（一〇節）姿が、「カインの道」（創世記四章八節）、「バラムの迷い」（民数記三一章六節）、「コラの反逆」（民数記一六章）によって示されていることを紹介します（一一節）。

彼らの教会に及ぼす影響は、①まったくあてにならないこと、②主から離れ、まったく役に立たないものであること、③行いは落ち着きがなく留まることがないこと、真理から迷い出た無駄な生き方となることを語っています（一二～一三a節）。

この様な者たちが教会に入り込み、そして指導者となり、人々の上に立とうとします。そうすれば、教会は混乱し、またバラバラになって衰退の道を歩むことになります。教会に戒規権が与えられているのは、教会に混入した罪が、教会を支配することが無いようにするためであり、教会の霊的秩序を守るためです。戒規は、人を裁くためではなく、教会の霊的一致と、罪を有する者の悔い改めを願いつつ行うものです。だからこそ、繰り返しになりますが、罪に対する裁きは、あくまで主にすべてを委ね、教会では主の霊的統治が

行われ、罪人の悔い改めを祈り求めることです。創造主なる神と、一被造物である私たちとの関係を十分に理解しておく必要があります。

主の裁きは、最後の審判においてなされ、罪人は自らの罪の故に裁かれ、主を信じる者は、主の恵みと赦しにより、救いに与ります（一四～一五節）。また、罪の混入は私自身にも起こることです。日々、罪の混入に注意し、悔い改め、主に従う心を持ち続けることができるよう、主の御言葉に聞き、主に祈り続けていきましょう。

「復活の生命を待て！」　ユダ一七～二五節、ゼカリヤ三章一～一〇節

二〇〇〇年四月九日

ユダの手紙は、キリストを否定する信徒たちがいる教会に対して記された手紙です。そしてユダは主イエスの使徒たちの言葉を思い出すように語ります（一七節）。使徒たちは繰り返し反キリストに注意するように語ってきました（一八節、参照・使徒二〇章二八～三二節）。

続けてユダは彼らの状態を語ります（一九節）。（新共同訳）「分裂を引き起こし、この世の命のままに生き、霊を持たない者」。（口語訳）「肉に属する者」、（新改訳）「生まれつきのままの人間」。彼らは、キリストによる救いを求めるために教会に来るのでなく、神を信じていない者たちと同じ様に、自分たちの欲を求め、それを教会の中に持ち込みます。牧師・長老といった教会の職に就くことにより、権威を自分の手に入れたい。これが彼らの本来人間として持っています罪の本質の表れです。

最近また、中学生による五〇〇〇万円恐喝事件をはじめとして、凶悪事件が増えています。しかし、このユダの言葉を見る限り、人間の本来持っている心は、まさに他人に対する痛みを知らない、凶悪で自分勝手な存在です。それが教会に持ち込まれ、社会の中で事

件となります。人間の存在自体にそういった心があります。現在、このことが表面に出てきています。

そしてユダは神の民に対して語ります(二〇～二一節)。「愛する人たち」とは、ユダが愛し、主なる神によって愛されている者です。この世の命のままに生きています人たちとは区別され、神による一方的な愛によります。ここに聖霊の導き、主イエスによる御父との交わりがあります。

ゼカリヤ書で、大祭司ヨシュアは主によって一方的に召されました(三章四～五節)。反キリストの持っています罪を、ヨシュアも持っていました。そして私たちも持っています。しかし、主が一方的に罪を赦してくださり、聖い者としてくださいました。この罪の赦しは、主イエスの十字架の苦しみと死を通して、与えられました。今日からの受難節は、キリストの十字架を覚える時であり、同時に私たちが与えられた罪の赦しの意味を覚える時です。

私たちは、キリストの十字架により、罪の赦しと永遠の生命へと導かれる信仰が与えられました。世の命のままに生きる者とは区別された存在です。今の生活において、罪の誘惑に囲まれ、時として主の御前に罪を繰り返す存在ですが、これら私たちの罪は、すでにキリストの十字架により赦されています。そしてさらに、主は永遠の生命を約束してくださっています。だからこそユダは、あなたがたを罪に陥らないように守り、喜びにあふれて非のうちどころのない者として、栄光に輝く御前に立たせることができる方は、わたしたちの救い主である唯一の神であると語ります(二四節)。

聖霊を通して、主イエス・キリストの御名により父なる神に祈る私たちの祈りは、聞き入れられ、これ以上罪に陥らないように主によって守られ、強められます。「イエス・キリストに守られている召されている人たちへ」(一節)と語ります。私たちを罪から救うのは、私たちの信仰ではなく、主の召しです。反キリストの誘惑に勝つには、何よりも私たち自身が、世の命のままに生きていた状態から聖霊の導きのもとに生きる者へと変えら

れたこと、そして聖霊に満たされ主との深いつながりがあることを、しっかり確認することです。私たち自身の信仰が成長すれば、教会は成長します。そして、サタンとの戦いに主による勝利を得ることができます。そして、私たちと神との祈りによる関係が強くなると、また他の人たちを用心しながら憐れむことが可能となります(二二～二三節)。憐れみとは、御霊を通して主に求めることであり、個人と個人との関係で見下す哀れみではありません。私たちはキリストの憐れみに入れられています。イエス・キリストによる救いにあることを、主に祈り続けることができます。私たちが戦い続けるのは、罪そのものであり、罪を負っています人間ではありません(二三b節)。

ユダは最後に、主への讃美の言葉をもって手紙を閉じます。私たちが、キリストによる救いと永遠の生命を信じることができるのは、私たちの生命・歴史・自然のすべてが、神の永遠から永遠に至る統治が唯一存在し、またこの世の秩序も正義も善も、すべてが神を起源としているからです。神を信じることが、私たちの信仰の基礎となるだけではなく、すべての人間の生活の基礎です。だからこそ、私たちの信仰生活は、社会的な秩序をもたらす大きな力となります。